

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 47. 48号

2002年10月～2003年3月

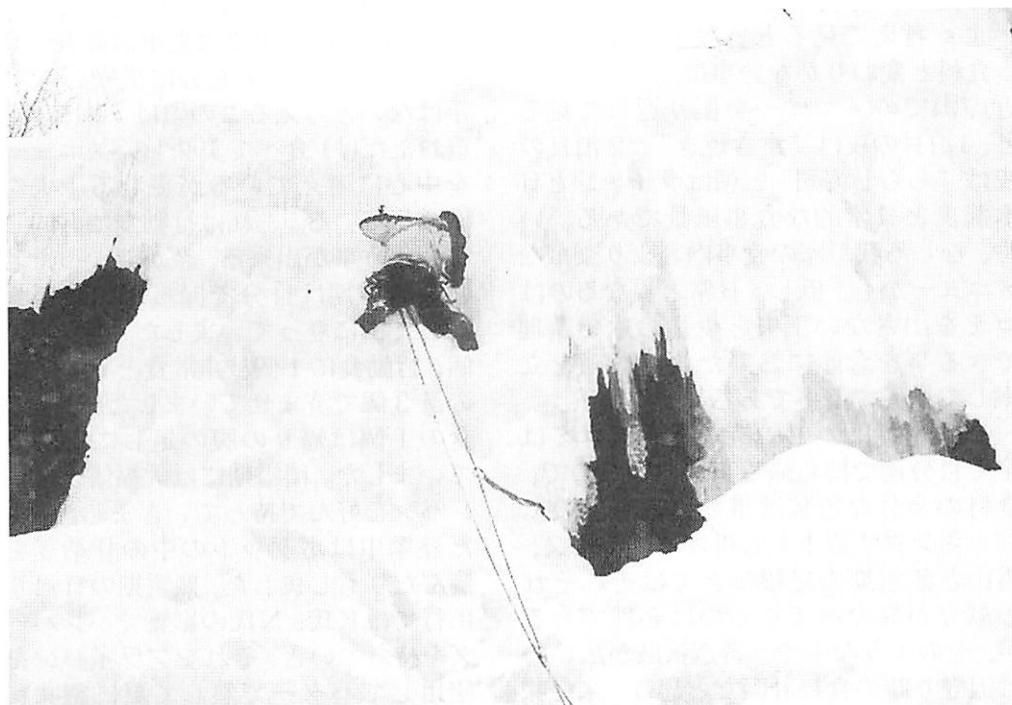


ACC-J茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 2002秋 & 2003春

No47 & No48



八ヶ岳南沢大滝を登攀中の吉田 Photo by SASAHIRA

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・グラフ・オブ・ジ・ヤパン・茨城

山の食料事情

山に行く前日に近所のスーパーで買い物をしていると『何を買っているんだい』と友人に声を掛けられました。『今から山登りに行くので、そのときに食べる食料の買出しだよ』と言うと、友人は珍しがって買い物籠を覗きながら『缶詰は? チョコレートは?』と訊ねてきた。やはり山の食料では缶詰&チョコレートが定番と思っているらしい。登山をしない友人にとって山の中で食料に興味がある事は分かったが、我々は山の中で何を食べているのだろう……。

よく考えて見ると普段家で食べている食料と変わりがない事に気付いた。最近の山でのメニューを振り返って見ると、1泊目の夜は“すき焼き”。2泊目の夜は“ちらし寿司”、朝はラーメンと日本蕎麦と日常的な食事風景である。いや、むしろ我が家家の食事内容より豪華なメニューかも。但し、日常と異なるのはゴミを出さない工夫と少量の水で調理できる事を念頭においた食料計画を立案して準備する事である。

自分達が山の中に持ち込んだゴミは全て自分達で持ち帰る事が原則なので、食材の余分な包装は事前に取り除いてパッキングする事を心掛けている。又、雪山と無雪期の尾根歩きではそれぞれの献立が異なってくるのは必然であるが、そのような中で一番選択肢が広いのは沢登り時の食料計画だと思う。米と味噌&調味料とアルコールを持っていけば後の食材は現地で調達が可能なので現場で調達出来的な食材で献立を考える。山菜、キノコ、岩魚等々、米は清流で研ぎ、美味しい水を使用し、焚き火で炊飯するので普段家で食べているご飯とは段違いに美味しい。焚き火を囲みながらの食事(宴会)は至極の時間がゆっくりと

過ぎて行き、山と融合したひと時を過ごす事が出来る。これと両極端なのが冬のビバーク時の食事である。少ない燃料と雪を溶かした少ないと水を使用しての炊事なので短時間で調理できるメニューになる。餅入りラーメン、インスタント汁粉、インスタント雑炊等々。腹が膨れて栄養が取れれば充分な食事内容になってしまう。山に登る精力の大半を登攀に使用し、背負うザックの重量も最低限に切り詰めた結果なので止むを得ないと考える。

しかし、山の中では食事が最大の楽しみなのでこれを充分に満喫しない手はないと考えるこの頃は(年に年を重ねただけ)食べて美味しいメニューを中心に考えているが更なる工夫を痛感している。これは行動食にも同じ事を言う事が出来る。金が無かつた若い頃無雪期は自分で握ったおにぎり持つて山に登っていました。朝食に1個、行動食に1個、非常食として1個の計3個で済ませていましたが、非常食の1個は帰りの腹の足しにもなっていました。積雪期には大福餅とかアンパンを好んで持っていました。また登攀中はポケットの中の甘納豆を摘んだりもしました。無雪期の日帰り山行ではK氏、N氏の影響でハンバーグを持っていき、それをフライパンを使用してバターで熱して更に調味料を加えてやると美味しく食べられますが、ハンバーグの値上げが近々あります。山の食料は安くて美味しい食い物に限ります。

(木村 一)



《目 次》

2002年 秋号 10月～12月 2003年 春号 1月～3月 ACC-J 茨城

卷頭言	(木村)	・・・・ 1
目次		・・・・ 2
集会報告		・・・・ 3
山行報告		・・・・ 4
親不知～白馬岳	(笛平)	・・・ 5～6
西表島イタジキ～古見岳	(笛平)	・・・ 7～10
西表島一周	(笛平)	・・・ 11～16
八ヶ岳南沢大滝	(吉田)	・・・ 17
八ヶ岳小同心クラック	(吉田)	・・・ 18
八ヶ岳赤ちゃん登山	(石川)	・・・ 19～20
鹿島槍ヶ岳東尾根（貴重な敗退記録）	(名雪)	・・・ 21～23
上州武尊岳川場尾根	(渡辺)	・・・ 24
古志山西稜（中高年ハイキング）	(菊地)	・・・ 25～26
梨澤七つ釜渓谷	(吉田)	・・・ 26
谷川岳西黒尾根（初めての雪山登山）	(石川)	・・・ 27～29
リハビリ山行のハズだったが・その1（鼻曲山）	(本図)	・・・ 30
リハビリ山行のハズだったが・その2（浅間隠山）	(本図)	・・・ 31
リハビリ山行のハズだったが・その3（仏頂山）	(本図)	・・・ 32
平標山 山スキー	(名雪)	・・・ 33～34
谷川岳一ノ倉尾根	(渡辺)	・・・ 35
テレマーカスキーハイキング編（モナカ雪は大嫌いだ）	(江平)	・・・ 36～38
会津駒ヶ岳（木南デビュー戦）	(木村)	・・・ 39～40
友好山岳団体の月報・会報・その他		・・・ 41～44
編集後記	(木村)	・・・ 45

表紙 上州武尊岳川場尾根を登高中の渡辺 Photo by SASAHIRA

集会報告

[於 土浦 Gusto]

.....[10月]

10月2日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

10月16日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鯉河

10月30日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

.....[11月]

11月13日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

11月27日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

.....[12月]

12月11日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

12月25日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鯉河

.....[1月]

1月 8日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

1月 22日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、石川

.....[2月]

2月 5日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

2月 19日

出席者 本団、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

.....[3月]

3月 5日

出席者 本団、木村、菊地、吉田、笹平、渡辺、鈴木、坂田

3月19日

出席者 本団、木村、菊地、吉田、笹平、渡辺、鈴木、坂田、木南

山行報告

《 2002年10月～2003年3月 》

.....[10 月]

10月8日～10月11日 北ア親不知～白馬岳 L笹平

.....[11 月]

11月15日～11月26日 西表島 L笹平

.....[12 月]

12月15日	日光男体山	L笹平、吉田
12月22日	八ヶ岳南沢大滝	L笹平、吉田、渡辺、名雪
12月23日	八ヶ岳小同心クラック	L笹平、吉田
12月23日	八ヶ岳赤岳	L木村、石川、金沢

.....[1 月]

12月31日～1月3日	鹿島槍ヶ岳東尾根	L笹平、吉田、渡辺、名雪
1月12日～1月13日	上州武尊山山川場尾根	L笹平、渡辺
1月13日	古賀志山	L本団、木村、菊地、名雪、金沢
1月18日～1月19日	谷川岳西黒尾根	L笹平、石川
1月19日	房総七ヶ釜渓谷	L本団、吉田、渡辺

.....[2 月]

2月 2日	鼻曲山	L本団、吉田
2月11日	浅間隠山	L本団、吉田
2月23日	仏頂山	L本団

.....[3 月]

3月 2日	那須大峠	L木村、名雪
3月16日	平標山山スキー	L笹平、吉田、渡辺、名雪、松原
3月21日～3月22日	谷川岳一ノ倉尾根	L笹平、吉田、渡辺
3月21日	浅草岳山スキー	L木村、名雪、江平
3月22日	守門岳山スキー	L木村、名雪、江平
3月23日	平標山山スキー	L木村、名雪、江平
3月30日	会津駒ヶ岳山スキー	L木村、吉田、木南、松原、佐藤

親不知～白馬岳

2002.10.08～10.10

パーティー L 笹平 孝

10/8 ホテル親不知の前にある駐車場に車を止めて、日本海の見える梅海新道登山口をスタートする。

樹林帯の急な登りが終わると入道山付近の平らな道になる。山を横切る道路を横断し、尻高山の登りになると、道がぬかるんでいる所がある。

坂田峠には狭い道路が現れ、この先からは急登になり、所々ロープが下がっている。水場のあるシキ割は、コースの途中から沢沿いの道に変わるもののがやや判り難い。沢に横たわる木にはナラタケが群生していた。

人のいない静かな道が続く。白鳥山頂上には白鳥小屋があり、無人小屋にしてはとてもきれいだった。ここで雨が降りだし、雨具を着て行く。

菊石山を過ぎるとテント場がたくさんある黄蓮乗越に着く。近くに水場があり快適そうだ。犬ヶ岳の登りになると、上部に梅海小屋が見えてくる。小屋の直下では急登になり、10日分の食料が入ったザックがとても重く感じる。

梅海小屋もきれいな小屋で、しっかりと手入れもされている。裏側には屋根の雨水を溜める桶があるので、水には困らなかった。夜から暴風雨になり、明日は歩けるのか不安だった。

10/9 朝になってもまだ雨が降っているので、しばらく小屋の中で様子を見る。やがて雨が上がるとガスも無くなり、海も見えるようになった。犬ヶ岳付近では紅葉が見頃で、尾根は色鮮やかに染まり、とても華やかだ。サワガニ山を過ぎた所で動物の足跡を発

見。目を凝らして見ると熊の足跡だと分かった。雨が上がってから歩いた足跡なので、近くにいてもおかしくない。しかも、これから熊の足跡と同じ方向に歩くのでショックだった。鉢合わせしない様に音を出しながら歩いて行く。しばらくは尾根沿いに熊の足跡があった。

黒岩平には水場が豊富でテント場もある。登山道は、雨水で浸食され深く削られていた。やがて湿原になり、池塘があるアヤメ平に着く。黄金色の草原が広がり、その中に静かにたたずむ池塘が点在している、とても綺麗な庭園だ。

やがて登山道の分岐を過ぎ、ガレた尾根を登ると朝日岳に着く。降り出した冷たい雨が体温下げていくので、すぐに出発する。頂上から一気に高度を下げ、朝日小屋への分岐を過ぎると水場が現れる。雪倉岳避難小屋には水場が無いので汲もうと思ったが重くなるので止め、小屋から空身で沢筋を降りて水を汲む事にした。雪倉岳の登りでは雨は止んだが、ガスで視界が悪く少し不安な場所もあった。この辺りはガンコウランが多く、ぎっしり黒い実が付いている。雪倉岳頂上に着くと、ガスの切れ間から雪が積もった白馬岳が見えた。ここから少し降りた所に雪倉岳避難小屋がある。

今日も小屋には、だれも人が居ない。暗くなるとまずいので、休む間もなく水汲みに出かける。小屋から東側のなだらかな沢筋を降りて行くと、10分位で水が取れる所に着いた。夜になると小屋も冷えるので、中にテントを張って寝る。

10/10 朝から視界が悪く風も強い。濡

れた登山靴はカチカチに凍り、足を入れるのに苦労する。靴紐も凍り付いて締め付ける事が出来ない。外に出ると風が強く、岩にエビのシッポが付いていて、もう冬山になっている。

夏山の装備しかないので手足が冷えるし顔が痛い。特に目出帽がとても欲しい。雨具のフードで顔を覆い、凍傷になるのを防ぎながら白馬岳を目指す。三国境の分岐で、白馬岳から降りてきた人と出会う。風が強く寒いので長くは話せない。この先の状態を聞いて別れた。

一昨日降った雪が20cm位積もり、表面がクラストしているのでアイゼンが欲しくなる。白馬岳頂上は風が強いせいか、あまり積雪は無かった。標識はエビのシッポが付いて、なんて書いてあるのか分からない。すぐに下にある小屋まで降りると、ガスが無くなり視界が開けた。村営の小屋では、あと三日で山を降りるそうだ。ここでビールを飲みながら、この先へ進むかしばらく考えていた。どう考えても今回の目標とした焼岳までの縦走は断念するしかなかった。

ここから猿倉へ下山を始める。まだ時間が早いので、大雪渓から続々人が登って来る。白馬尻小屋は早くも解体作業をしている最中だった。猿倉の近くで山ブドウやナラタケを探って行く。猿倉に着き、小屋の中で電車の時刻表を見ると、日に数本の糸魚川行きの電車があと30分後だった。今からタクシーを呼ぶと、この電車には間に合わない。そこで小屋の人に頼んで白馬駅まで乗せてもらう事になった。なんと車はポルシェだ。湿っぽいザックを後ろの席に乗せ、駅まで飛ばして行く。無事にこの電車に乗り、糸魚川へ向かう。日が沈み暗くなった頃、親不知駅に着いた。

た。ここから駐車場まで3km程だが、途中トンネルと急カーブの連続で歩くのは危険だと分かっていたので、タクシーを呼ぶ事にした。しかし電話をすると、親不知駅まで遠いからと言われ拒否されてしまう。仕方なく、ヘッデンを付けて夜の8号線を歩き出す。

夜は大型トラックの交通量が異常に多い。道の駅を過ぎると歩道の無いカーブが始まり、早くも引かれそうになる。カーブのイン側は危険なので常にアウト側を歩くよう心掛ける。さらにトンネルが始まると、そこは戦場に変わる。生きて帰るには、この難関を突破しなければならない。ここを通る運転手は、夜こんな所に人が歩いているとは全く思わないだろう。トンネルの中では、柱と柱の間に逃げ込みながら少しづつ進む。こんな状態が1km近く続く。2回引かれそうになりながら駐車場に辿り着いた。

10/8 駐車場(6:30)-白鳥小屋
(12:00)-梅海小屋(15:00)
10/9 梅海小屋(8:00)-朝日岳(13:00)-雪倉小屋(17:00)
10/10 雪倉小屋(8:00)-白馬岳(10:30)-白馬小屋(11:00)-猿倉(15:00)

(笹平 記)

西表島 イタジキ川～古見岳

2002.11/15～17

パーティー L 笹平 孝

西表島は亜熱帯の原生林とマングローブに覆われ、大自然が多く残されている。そんな西表のジャングルを歩いてみたいと前から思っていた。出発の2ヶ月前から、本格的に資料収集を始める。しかし、イタジキ川遡行の記録は少ない。十分とは言えない資料の中で計画を立てることになる。

11/15 蒲田から早朝の電車で羽田空港へ行き、朝一番の飛行機で石垣島へ向かった。石垣島に着くとビックリするほど蒸し暑く、半袖になんでも汗が出る。まずはバスに乗り、200円で離島桟橋まで移動した。

さっそく八重山郵便局に行き、局止めで送っておいたザックを受け取る。帰りの着替えなどが入った荷物を、荷物預かり所に持て行くと10日で3,000円すると言うので預けるのを止め、悩んだ末に思い付いたのが、近くの郵便局に局止めで送ってしまう事だった。郵便局に戻り、西表島の帰りに通る大原郵便局へ700円で荷物を送った。

離島桟橋で船のキップを買い、高速船の出発時刻までの間は、エメラルドグリーンの海を見ながらオリオンビールを飲んで過ごす。船には10人ほど客が乗り込み西表島へ出航した。港を出ると、まるでレースをしている様な勢いで飛ばして行く。

船浦港に着くと、船会社の無料送迎バスに乗り込み浦内川で降ろしてもらう。浦内川観光船で今日のうちにに行ける所まで進もうと思い、キップを買いに行ったら、まさかのアクシデントが起き

てしまった。単独で縦走する人は船に乗せられないと言ってきた。その日のうちに戻る往復キップなら良いが、片道キップは駄目だと言う。近くにある貼り紙を見ると、今年の8月末に単独で山に入った大学生が遭難し、行方不明になっている。仕方なく諦め、かなり遠回りになるが反対側の横断道から山に入る事にした。

バスに乗り大富まで移動するのに1時間もかかった。大富のバス停からサトウキビ畑の道を進み、やがて木々が覆い被さった薄暗い林道に入る。

サトウキビをかじりながら歩くのは気分がいい。途中、特徴のあるセミの鳴き声や、セマルハコガメと出会う。辺りが暗くなった頃、展望台に着いた。日が落ちると涼しくなり、心地良い風が吹き抜ける。目の前には仲間川の湿原が、月明かりで薄っすらと照らされていた。

ビールを飲んだ後寝ようとするが、ヤエヤマオオコウモリが木でガサガサする音や、動物たちの不気味な感じの鳴き声でなかなか寝付けない。緊張しているせいか、夜の12時に起きてしまう。なんか周りでガサゴソ音があるので照らしてみると赤い色のオカガニが歩いている。暇なので夜行性の生き物を見ようと、夜の林道を散策してみる。林道沿いの溝には沢山のオカガニが歩いていた。

11/16 朝4時にヘッドライトを点けて出発する。林道はすぐに草が覆われ始め、歩き難くなつた。林道終点か

ら横断道の入り口があり、登山道に変わる。朝の5時頃には汗でびっしょりになり、ビールが欲しくなった。

横断道は沢沿いに道が続いて、特に始めの頃は小さな沢を何回か通ったりするので判り難い道が続く。突然、暗闇の中を獸が走り出し、犬の様な低い声を発している。身の危険を感じ、慌てて近くの木に登った。獸は数回威嚇した後、どこかに去って行った。もしかしたら、ヤマネコなのかもしれない。

途中、迷い道に吸い込まれて横断道から外れてしまう。目の前に滝が出てきた所で気づき、来た道を戻る。ここで1時間のロスをしてしまった。しだいに川幅も広くなり道も明確になる。辺りが明るくなりだした7時頃、ようやくヘッドランプを外せた。古見への分岐点を過ぎると一番小屋跡そして、二番小屋跡を通過して行く。雨が降り出したと思うといきなりスコールになり、木の下で傘を差してしばらく様子を見る。足首辺りに少し痛みを感じたので見てみると、なんとヒルが食い付いていた。ライターで次々に焼き落とす。両足合わせて6匹にやられた。どんどん這い上がって来るヒルは、防虫スプレーをかけて退治した。スコールは30分程で弱まったので、先を急いだ。10時過ぎにやっとイタジキ川出合いに到着できた。

長く険しいアプローチだった。沢は増水しているのか良く判らないが、ほとんど濁りは無い。今も雨が降り続いているので、悩んでいる間に増水してしまう。行ける所まで行こうと思い出発する。イタジキ川出合いから左岸に道が出来ていて、道なりに高巻いて行く。20分でマヤグスクの滝に着いた。滝は扇状に広がり綺麗な光景である。階段状になつていて、簡単に登ることが出来た。マヤ

グスクの滝を越えるとゴルジュになり、水の流れも勢いがある。ゴルジュに入って一番目の滝は右側を登る。続けて二番目の滝は右側を行ってみるが、最後の乗り越えの段差が大きいのでなかなか上がることが出来ず、しばらくの間、もろに頭から水を浴びる。

耳の穴にたっぷり水が入って、出すのにひと苦労した。この二番目の滝が核心だと思っていたら、とんでもなかつた。三番目の滝は、左側に行く。周りはハングしているので、滝の水流に右足を掛けで行くしかない。しかし、足を入れると水の勢いが強いので、剥がされてしまう。手で掴む所も無い。

目の前には、苔むした平らな岩が積み重なっていた。足で苔を落とし、滑り難くして水流の中にある岩に乗り移る。そして、次ぎの一歩が難しい。少し高い位置にある平らな岩板に左足を掛けるが、今にも滑りそうで立ち込む事が出来ない。谷川岳のV字左ルート核心の様だ。手は平らな岩板に置いておく事しかできず、何の役にも立たない。数分が経ち行く決心が付いた。滑るな滑るなど呪文の様に唱えながら、ゆっくりと立ち込む。後は、慎重に細かいスラブ状を上がり、滝を乗り越えた。気が付くと体が震えている。

そして、ふと頭の中に疑問が走る。今、どこで何をしているんだろう。すぐに答えは出たが、極度の緊張で記憶が飛んでいたみたいだ。6mmのロープを木に固定し、末端に結んであるザックを引き寄せるが、やはり被った岩に引っ掛けている。ロープを頼りに滝の落ち口まで行き、水流の中を無理やり引き上げた。やっと終わったと思うと、一気に気が抜け座り込んだ。

この先はゴルジュが終わり、明るく穏

やかな沢になる。沢の水は濁り始め、石の上にある植物が水没しているので、平水より20cm位増水している。やがて、トロ場になると腰以上の深さになり、左岸の獣道をしばらく歩く。

日が差さないためか、藪は薄く比較的歩き易い。しかし、細いツルやツルアダンが行く手を阻んでいる。細いツルは山芋のツル程の太さなのに、とても丈夫で体に引っ掛かってそのまま押し切ろうとしても切れる事は殆ど無い。ツルアダンはとげとげの葉がある大きい植物で、よく密集して生えている。首に絡まるとすごく痛い。やがて左から入る大きな沢の二俣は、手前から右の尾根を大きく高巻く。また左から入る沢の二俣を過ぎると大きなナメが現れ、気分良く歩ける。ナメの上部の方は、岩盤が幾つも割れていて水が地下を流れていた。

まもなく巨岩地帯に変わり、スケールの大きさにあ然とする。滑りやすくデカイ岩を、縫うように進む。巨岩地帯を過ぎた所で滝の音が聞こえ出す。滝の200m位手前から左側の急斜面を高巻いた。まもなく幻の湖が現れる。湖と言うよりは、大きな釜の感じがする。ここは右側が崖になっているので、崖の手前から大きく高巻いた。沢を歩いていると、茶色の大うなぎがバシャバシャと逃げ回る。うなぎなのに動きは魚の様に機敏で、なんか気持ち悪くて捕まえる気にならなかった。沢はトロ場に変わり蛇行しながら続いている。

左岸の獣道を沢から離れない様に歩く。1時間歩いても高度差は10mもない。途中に出てきた枝沢のトロでは、倒れた木を利用して渡った。沢の上部になると普通の沢に変わり歩き易くなる。沢がどんどん分かれていながら、相変わらず沢が蛇行しているので、この先、行こうとしている目的地のP393にはどの沢を登れば

良いか判らなくなる。何本かの沢筋を登ってはまた戻りを繰り返し、P393基部の尾根に辿り着いた。この時、GPSナビゲーションは必需品だと痛感する。辺りは暗くなり始めているので、急いでテントを張る。雨のおかげで、すぐ近くの所で水が汲めた。テントの前でヒルがないか地面を見ると、ここにも数匹生息していた。残り少ない防虫スプレーを散布し、いそいで着替えてテントに入った。

11/17 朝起きると雨は止んでいた。今日はガスも無く、遠くの山が見える。P393から北に延びる沢筋を下って行った。大きな滝も無く、沢が5:1で合流している所からユツン川の本流を進んで行く。左岸には枝を切り開いた獣道があり、赤テープも所々にあった。そのまま登って行くと尾根に突き上げたが、どうもおかしい。ユツン川のコルにしては標高が低い。

木登りをして見回すと、遠くに古見岳があり、目標のユツン川のコルも遠くに見えた。P393の東側にある尾根に出たみたいだ。それにしてもこの辺は、地形図では読み取れないほど複雑な地形が広がっている。

いったん途中まで戻り、違う沢筋を上がって何度も木を登り、現在の位置を確認する。はつきり言って、地形図上で現在地は殆ど判らない。まあ、いざとなればユツン川を下れば良いのだから気は楽だ。

支尾根を1本越えて本当の本流に合流した。それから30分もするとユツン川のコルに着く。周りは木に覆われて視界が無いので、現在地の確信がもてない。違う沢を降りてしまうと確実に遭難する。少し高いところから見下ろそうと思い、古見岳方面の急

斜面を登り始める。そこはツルアダンのジャングルで、上を乗り越えながら進んだ。そして、振り返るとユツン川のコルだと確信できた。

ユツン川のコルから急な沢筋を降りて行くと、赤テープがあちこちに出てきた。この辺りに古見岳への登山道があるらしいが、どこにあるのか良く判らない。右側を注意深く探すと、しっかりした道を発見できた。ここにザックを置き、古見岳までピストンする。頂上付近は、しの竹で覆われている。三角点のわきに、遭難した大学生への非常食やメッセージが入った袋が置いてあった。ザックまで戻り、しっかりした登山道を降りる。

しばらくすると相良川沿いの道になり、何度も渡渉を繰り返す。深い所は膝まで水に浸かる。赤テープはあるが、迷い易い道が続いた。突然、琉球イノシシがブヒーと鳴いて逃げて行く。この辺りは、イノシシが掘り返した跡がやたら目に付く所だ。

やがて車の音が聞こえ出し、17時半に道路に出られた。とりあえず、古見の部落まで行く事にする。観光バスが何台も通過して行く中、泥まみれの姿でひたすら歩いた。古見のバス停で時刻表をチェックし、近くに自販機があるのを見つける。ビールが売っていたので、その場で1本一気飲みした後、2リットル分買い込んだ。

さて、今日のねぐらはどこにしようか。西表島は基本的に島内テント禁止になっている。バス停では目立つのでやめて、ここに来る時めぼしい所を見ながら歩いていたので、近くの後良川河口に決めた。ヘッドランプを点けて河口に向かう。人目につかない場所にテントを張る。ザックの中身は殆どの物が濡れているので、全部広げて乾かす。服やズ

ボンは、目の前の川で泥を洗い落とした。ついでにカニを十数匹捕まえてくる。大きいカニは両方のハサミ叩いて威嚇してくるので驚いた。茹でて食べるとカニミソがとても旨い。中には苦くて食えない種類のカニもいた。その辺に食いカスを捨てながら食べていると、大きなナキオカヤドカリがゴソゴソ集まって来て、一晩中ゴソゴソしていた。

11/15 大富バス停(16:40)-展望台(18:10)

11/16 展望台(4:10)-横断道入り口(4:50)-古見への分岐(7:40)-イタジキ川出合い(10:30~11:10)

-滝越え終了(12:10)-二俣

(14:30)-幻の湖(15:30)-P393基部(18:40)

11/17 P393基部(8:40)-ユツン川のコル(13:30)-登山道(14:00)-古見岳(15:00)-道路(17:30)

(笹平 記)





登攀する滝を
バックに 笹平



遡行中の笹平



南洋植物で
ポーズ 笹平

西表島一週

2002.11/18~26

パーティー L 笹平 孝

11/18 ぐっすりと眠れたおかげで、9時のバスに乗り遅れた。次のバスは…なんと13時だ。古見のバス停から大原まで8kmも歩く気になれないで、タクシーを呼ぶ事にする。公衆電話を探すがまったく見当たらず、近くの小学校に行ってみる。職員室にお邪魔して電話を貸してもらう。大原まで1,200円かかった。

もう昼なので人気のある南国に入つてみる。何を食べるか迷ったあげく、無難にゴーヤチャンプルを注文する。やはり本場のチャンプルの味は絶品だ。このお店は、地元で捕れるノコギリガサミという大きなカニを使ったメニューもある。このカニのはく製を見たとき、昨日食べたおいしい方のカニは、このカニの小さいやつだと分かった。

食後、売店に行き食料とビールを買ひ込む。品数が少なく、米は一番小さい物が2kgもあり、買いたくても買えなかつた。仕方なくラーメンを買う。デザート用に、地元で採れたパッションフルーツを1個買った。いよいよ楽しみにしていた南風見田へ向かって歩き始める。途中にある、忘れな石に寄つてみる。

道路の脇にはパパイヤの木が目立つが、実はまだ青いので撮るだけにした。道路終点の南風見田の浜には立派な展望台があり、目の前には綺麗な海と、どこまでも続く砂浜が広がつていた。展望台には誰もいないので貸切だ。

林の中にはテントやブルーシートがあり、数人住み着いているようだ。近くの水道で、久しぶりに頭を洗う。パッションフルーツは種が多くて食べ難いが、味は

甘酸っぱくておいしい。ビールを飲んでいると、ここの住人が水を汲みに来ていろいろ話す。この人は、北海道から来てこの辺の浜に住み着き、すでに10年経つ人だった。お金が無くなればアルバイトをして米を買う生活をしていると言う。1時間以上話をした所でこの人のテントに行き、昔の西表島の話とか、興味深い話を聞いたりと夜の10時頃まで話し込んだ。夕飯をご馳走になり、米まで貰えてとてもお世話になった。

11/19 9時頃、海岸線を鹿川まで歩き出す。今日の引潮は+59cmの12時半なので、まだリーフは出でていない。砂浜が終わると大きい石がゴロゴロしていて歩き難い。奥にある砂浜にも、ブルーシートがいくつか張つてある。砂浜からイカ釣りをしている人に会い、この先の状況を聞いたりした。

海には鮮やかなブルー色をした小魚がたくさん泳いでいる。海岸は疲れるので、途中からリーフの上を歩き始めた。まだ海水に沈んでいるが、それほど深くないので疲れない。12時になるとリーフが出て格段に歩き易くなつた。この先には絶壁が張り出している難所が1ヶ所ある。ここは手前から高さ100mの大高巻きをするか、10mの絶壁を登り越えるか、海を泳いで通過する方法がある。近づくと10mの絶壁にロープが二本下がつているのが見えた。とりあえずロープの所に行く事にする。潮が満ち始め、波が荒くなり少し深い所を通つて行く。

岩を一段上がった所が取り付きで、広いテラスになっていた。見上げると垂直の岩場だ。ホールドが適度にあるので難しくは無いが、ザックを背負ってでは無理そうだ。下がっていたロープをザックに結び、空身で登る。三級A0位の岩場を登り、不安定な体勢でザックを引き上げる。20kg以上あるザックを引き上げるにはかなり大変で、岩の出っ張りに当たって上がってこない。すぐに腕がパンパンになった。いったん離し、回復してから気合を入れて引き上げた。

この岩場の先には、大きな岩が割れていてそこを飛び越えるスリリングな所がある。リーフも無くなり、ふたたび歩き難いゴロゴロした岩の上を行くと、だんだん鹿川の浜が近づいて来る。南風見田の浜から6時間で鹿川の浜に到着した。

小さな沢が二本あり、その間にあるアダンの木の下にテントを張った。地面は砂地で、目の前には青い海が見える最高のテントサイトだ。一面に広がる砂浜は、他の人は誰も居ないプライベートビーチだ。となりにヤシの木があり、南の楽園の雰囲気が漂う。

さっそくヤシの実を探ってみる。振ってみると中にあるココナッツジュースの音が聞こえ、実をナイフで削ると硬い種が出てくるので、石で叩いて割った。ほのかに甘みのあるジュースがたっぷり入っている。種の中に付いている白い所はこうばしい味がした。次は、磯に食料を探しに行く。アワビのような貝が岩にへばり付いている。拾ったペグを、貝と岩のすき間に一気に突っ込み貝を剥がす。テントの裏にはバナナの木が何本かあり、まだ青い実が付いていた。バナ

ナは少し早い方が好きなので食べてみると、半端じゃなく渋い。すぐ吐き捨てた。テントに戻り、捕ってきた貝を焚き火で焼いて食べる。歯ごたえがあり良いつまみになる。今夜は、波の音を聞きながら眠りについた。

11/20 今日は、時間に余裕があるので近くを探検したり、砂浜で日光浴をして過ごす。崖の下には洞窟があり、人の住んでいた跡がある。ここには鹿川仙人と言われる人が住んでいて、だいぶ前病気になって町に帰ったそうだ。鹿川から先は、峠を越えて網取湾にぬける。向かって右側の沢に峠越えルートの入り口がある。しっかりした道が続いて、簡単に峠に辿り着いた。反対側にあるウダラ川を下って行くと、前から2人組が登ってきた。向こうの人たちは驚いた様子だが、こっちも驚いた。出会うのはイノシシ位だったから、こんな所で人と会うなんて考えもしなかった。2人は、砂川小屋跡からやって来て、鹿川に一泊したらまた戻ると言っていた。2人と別れ、沢の二俣の所で休憩する。途中で採ったシークワーサーは、酸味が強いみかんの様な味でおいしい。

沢には手長エビがたくさんいるが、逃げ足が速いのでなかなか捕まらなかつた。だんだん沢の水量が増えてくると、魚が現れ始めた。毛ぼりを垂らすと、釣堀のように魚が釣れる。この魚は歯が鋭いので、すぐ糸を切ってしまう。あっという間に毛ぼりを全部使ってしまった。

この先、道が右岸と左岸に分かれ、右岸の道を降りた。マングローブが目立ち始めると、道がはっきりしなくなる。この辺のウダラ川は深さもありそうで、水中の土はドロドロして潜る。このまま

では進み難いので、右の沢筋を登り尾根に出た。沢筋以外は藪で歩けないので、ウダラ川へ向かう沢筋を下る。ふたたび川に降り立ち、そのままマングローブの中を歩いて行った。

この辺の川は潮位の影響をかなり受けるので、潮が引くと歩き易くなる。網取湾に出ると、砂浜と干潟が広がっていた。

砂浜の奥の方に砂川小屋跡がある。大きな木が印象的な所で、雨が当たらない様にブルーシートが数枚張ってある。小屋の形跡はなく残骸が積み重なっていて、空いた一升瓶が大量に積んであつた。

先ほどの2人達の服がハンモックに干してある。テントを張った後、置いてあったモリを借りて前を流れている沢に行く。小魚と手長エビしか見当たらない。収穫は手長エビが20匹位だった。海に行くと、カキが数個捕れた。カキは焼いて、エビは茹でて全部食べた。しかし、ここはアリが多い島だ。10分もするとアリが群がり始める。

11/21 ウダラ川河口に釣りに行く。魚が群れて泳いでいるので、渓流竿にブラックバス釣り用のワームを使うと、一瞬にして糸が切られた。1.5号の糸では駄目なので、諦めて戻る。すると、6号の糸が置いてあったので少し貰い、またチャレンジしてみる。糸と針だけの原始的な仕掛けを作り、その辺にいるハゼの仲間のトントンミーを餌にした。餌を投げ込むと、いきなり食い付いてきてすごい引きだ。ごぼう抜きで魚を上げると25cm位の魚が釣れた。黒鯛の仲間で、ここではチンと言うミナミクロダイだった。警戒心が強い魚で、何匹か釣るとスレで釣れなくなった。

2人が帰ってきて、しばらく話をする。東京から来て、この場所に3ヶ月いる人と、

埼玉から来て3日目になるこの常連の人だった。8月中には、最近ここに住み着いていた水田さんという元先生が居たが、目を患って帰ったと言う。この人は、ここに暮らしていた今は亡き砂川仙人(恵勇爺)の事を書いた、イリオモテのターザンという本を出している。

だんだん暑くなってきたので海で泳いでいる間、他の人は海に潜って獲物探しをしている。今夜の食事は豪華になった。海で捕った綺麗なクモガイとマングローブの中で捕まえた大きなシレナシジミは焼いて食べ、チンは刺身と焼き魚に。あらは、網にかかったナマズの仲間をぶつ切りにして一緒に鍋にして食べた。今日は、獲物捕りと調理で終わり、くつろぐ時間が余り無く忙しい1日だった。それだけ自給自足は大変な事だと思った。

11/22 今朝、網にかかった大きいノコギリガサミを味噌汁にして食べた。今日は、潮が引く昼頃に船浮の方へ移動する事にした。埼玉から來た人も船浮の民宿に帰る予定だ。雨と風が強い中、先に出発する。道を知っている人と一緒だと、ルートファインディングが出来ないからだ。

最初めのうちは岩が多い所があり、海に浸かりながら歩いた。小さな砂浜を二つ過ぎた所でサバ崎には行かず、ショートカットして山越えのルートに取り付く。このルートはしっかりとした道だが、下りは滑り易かつた。

山を降りると遠浅の海に出る。潮が引けば干潟になる所だが、少し早かった様だ。問題なく海を通過し、海岸沿いにある道を行く。辺り一面に、

波に打ち寄せられたサンゴの欠けらが山積みになっている。アダンの森に入ったり砂浜に出たりを繰り返すと、イダの浜に着く。ここから船浮の部落まで目と鼻の先だ。

船浮は陸路が無く船でしか交通手段がない所で、唯一1件だけ売店がある。売店で食料とビールを買い、飲んでいると埼玉の人がやって来た。2人で一緒に飲む。埼玉の人はこの辺りに顔が広い様で、この人のお陰で売店の人からカレーをご馳走になった。雨が強く降っているので、イダの浜でテントを張るのは諦め、今日は素泊まり2,000円にする。シャワー、洗濯機、炊事場、テレビ、エアコンがあるので素泊まりで正解だった。夜、おでんの差し入れがあり、隣の部屋の釣りに来ている人と一緒に食べた。隣の部屋の人は、泡盛の飲み過ぎで2日程ダウンしていると言っていた。

11/23 隣の部屋の外にあるテーブルで、朝から泡盛を飲んでいる人達がいた。そして、朝から一緒に飲む。酒好きの地元の人が2人いて地酒の泡盛を頂く。ダウントしない内に出発しようしたら、今、解禁になっている琉球イノシシを食べてとと言われ、炒め物をご馳走になる。2人と別れ、昼の船で白浜へ向かう。

天気も回復して暑くなりだす。ここからバスに乗り浦内川で降りる。観光船乗り場から先に続く細い道があるので行ってみた。この道は、浦内川支流の宇多良川右岸に続いている。まもなく薄気味悪い炭鉱跡が見えて来ると、少し開けた所に当時の建造物がかろうじて残っており、木が絡まり付いていた。ザックを置いて、さらに奥へ続く道を行く。

上流付近まで行ったが、何もない途中から引き返す。今日は、炭鉱跡の少し手前にテントを張る。宇多良川で良

い型のチンが釣れた。明日の食料として網袋に入れ、川に沈めて置く。

11/24 昨日沈めた網袋を引き寄せて魚がいない。逃げられた。もう一度、釣りをするとそこには2mはあるサメが現れた。そういうれば、網袋はやけに大きな裂け目があったので逃げられたのではなく、どうやらサメに食われたようだ。

観光船乗り場に行き、観光という事で大きいザックを預けて船に乗る。偶然、北海道で知り合った人に会う。最北の地で知り合い、四ヶ月後に最南の地で再会するなんてビックリ！。軍艦岩から歩道を歩いて滝を見学しながら行く。他の人はカンピラの滝で引き返すので、この先は1人になる。今回、こちら側からイタジキ川出会いまで行けば横断道が完全に繋がる事になる。小さい沢の横断以外は、しっかりとした道が続いている。最後にイタジキ川をロープ沿いに渡ると、見覚えのある岩棚に着いた。8日前に来た時は気分が全く違い、とてもすがすがしい気分だ。1時間程のんびりしてから、軍艦岩へ戻る。

帰りの船にはお客様が2人だけで、東京から来て西表字島をレンタルバイクで観光している人と一緒になる。それから月ヶ浜に移動する。砂浜が弓なりに続いて綺麗な所だ。ここは夕日を見るスポットとして人気がある場所なので、日が沈むまでは人が多い。薄暗くなつた頃、テントを張る。

11/25 明るくなると同時に出発する。約1時間で星の砂海岸に着いた。ここは砂は、全て星の形をしている。他の砂浜にはこんなに形の揃った星砂は無かった。そして、ここから朝一のバスに乗り大原へ移動する。

バスの運転手さんには顔なじみになりつつある。終点の大原に着くと大原郵便局で局止めで送った荷物を受け取り、石垣島へ戻る準備にかかる。

昨日の東京から来た人とまた会い、挨拶を交わす。仲間川遊覧船乗り場に行ってみると、道路の脇にたくさんバナナの木があり、思わず青いバナナを食べてみる。やはり強烈に渋かった。

高速船で石垣島へ戻り、公園でテントはやめてユースホステルに行ってみる。ここのおばさんは琉球踊りの先生でもあり、踊る時の手の動きはさすがに凄かった。夜は、ここに泊まっている人達が集まり、泡盛を飲んだり話をしたりとなごやかな夜になった。

11/26 今日は東京に戻る日だ。桟橋には、東京から来た人がバイクに荷造りをしていた。よく会うなあと話しかける。この人も今日、フェリーで帰る所だった。バスで石垣空港へ行き、荷物を一律1,000で自宅に配送するサービスの

手続きをする。エメラルドグリーンの海を見ながら東京へ飛び立つ。

11/18 古見バス停(11:10)-大原(11:30~13:00)-南風見田(15:30)

11/19 南風見田(8:50)-岩場(13:00)-鹿川(14:50)

11/20 鹿川(10:50)-峠(11:20)-砂川小屋跡(13:40)

11/21 砂川小屋跡

11/22 砂川小屋跡(12:30)-山越え取り付き(13:10)-船浮(14:40)

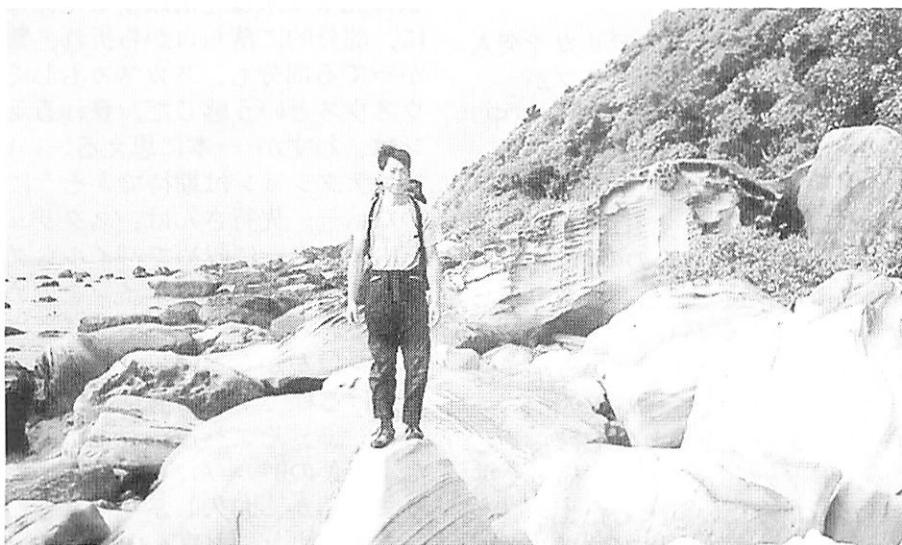
11/23 船浮(12:50)-白浜(13:20~15:00)-浦内川テン場(16:00)

11/24 軍艦岩(10:00)-カンピラ滝(10:40)-イタジキ川出会い(11:50~13:00)-軍艦岩(14:30)

-観光船乗り場(15:00)-月ヶ浜テン場(15:30)

11/25 月ヶ浜テン場(7:00)-星の砂海岸(7:50~8:20)-大原(9:30~11:00)-石垣島(11:40)

(笹平 記)



海岸沿いに一周する笹平

八ヶ岳南沢大滝

2002.12.22

パーティー L 笹平 孝、渡辺聰子、吉田 仁、名雪博二 (ACC-J東京)

12月の連休は八ヶ岳っていうのが俺にとってほぼ恒例の行事になりつつあるなあ～。多分、入会以来毎年だと思う。黄蓮谷へという話も出るんだけど、結局諸々の事情によりトイ面の山になっちゃう。最近は心変わりして、登りにじやなくて滑り下りてみたい衝動に駆り立てられる今日この頃です。まあ一、俺には無理か！？

今回の予定は、前半アイス後半は登攀の予定、バイルも研いで準備万端っていうのに現地は大雪らしい、高速も止まってるらしい、しかしせっかくの連休に山に行かないのはアホらしいってことで行くことにしました。案の定途中で高速は下ろされたけど無事到着。着いた時には雪も止んで明日は大丈夫そう。取りあえず一安心ってことで軽トラの荷台にて一杯ひっかけ仮眠の態勢に入ったのでした。

翌朝、山荘までの林道にデリカで突入していくが、みなさん例のカーブが

上がれないらしい。往生際の悪い連中は、諦めきれずと行った顔で、車からザックを降ろしている。その間、果敢にもTOYOTAが2台アタックするが敢えなく敗退。そこへ、世界の変境地にローバー！道なき道を突き進む我等がヒロー！ディフェンダーが登場した。

『よっ、待ってました！』という喝采はとくになく、ドドオ、ドドオ、ドドオ～とコーナーを駆け上がり、しばらくしてドドオ、ドドオ、ドドオ～と帰って来た。駄目だったみたい。大したことねえ、、、。これでみなさん諦めがついたらしく、トボトボと林道を歩き出したのでした。

ところで当初の予定では、三叉峰を登ることになっていたのですが、昨日の大雪を考えて急遽ベースを行者小屋に変更して、その道すがら大滝を登りました。うってことになったのでした。一般道から折れ大滝に向かうトレースはあるものの結構いい感じに深いです。とりあえず手前の小滝を偵察に行くと何パーティーか登っていて取り付く隙間はなさそう。聞くと仲間のパーティーが、大滝に向けエッチラホッチラ、ラッセルの真っ最中らしい。ご苦労様です！我々は少し休んでから向かいます。

そろそろ、いつかなあ～て頃合いに出発。タイミングは、ばっちりでした。しかし、氷の状態はというと、かなりよくない。通常、オオギ状に見事な氷曝を構成するた滝なのに、部分的に落ち口から折れ、繋がってる部分も、スカスカもしくはウスウスという感じだ。登れるラインは、わずか一本に思える。いいプロテクションは期待できそうにないなあー。先行さんは、スクリューをホールスターに収めてバイルもグリベルの新作、何処のラインを攻めるのかと思いきや、そのマカラニウエスタンは左から巻いてトップロープを掛ける様です。結構見かけ倒し、、、。そこへ後続が上がって来た。千葉のBちゃん、Tゾー、じゃありませんか、お久しぶり！さて、僕いきま～すと、ど真ん中のラインに取り付く。千葉の奴らが『あれ～、右の氷柱行かないのお～』なんてほ

ざいてるが、無視、無視。

出だしはスラブ状を数十メートル登つてめちゃくちゃ安定したところに辿り着く。そこからは、スカスカ氷で傾斜もかなりきつい。まじかで見ると、この先行きたくねえーって感じ。でもここで下りたら後で何言われるか分かんないしね、行くしかないでしょう！

中まで入り過ぎて、出だし悪いです。打ち込んでも壊れるばかりなので、バイルで雪を払いながらフッキングで行く。足が決まったところで、一本取ろうとするが、刺すだけで根元まで入っちゃう。辛うじて『回して』入るところを見つけてランナーを取る。落ちた

ら、ぜえ～つた抜けるな、、、、。とにかく集中して引っかけ、足のせで登じる。徐々に傾斜がおち面になった氷に一本取る、その先慎重に乗っこし雪田を立木までラッセルしてビレイ解除。TRの支点を作っているとTぞーが右の氷柱から登って来た。『垂直だけど面になつてるので登りやすかったよ』だって。下は20センチ位しか付いてなかつたじゃん。よくリードしたね！

(吉田 記)

八ヶ岳小同心クラック

2002.12.23

パーティー L 笹平 孝、吉田 仁

後半は3パーティーに別れて登攀。雪稜より岩っぽいところにということで、小同心クラックへ。トレースは、大同心までで、そこからのトラバースは腰までのラッセルになつた。てことは先行さんは無し。天気もいいし快適にのんびりとクライミングが出来そうだ。ルートは明白、クラックというより岩峰の凹部を行く感じだ。本日はオールセカンド、トップは大変だ、ホールドに積もつた雪を払いながらのクライミングだ。とは言えセカンドも決して楽しいやない。払った雪が、ガンガン降ってくる。ビレイ点が狭いので避けることもできずヘルメットの中に身を屈める。2ピッチ登つた当たりに後続が上がつて來た。4~5人のパーティーだ。取り付きで、やけにはしゃぎまくりでうざい。ちょうど足下が雪で一杯になつたので下に蹴り落とす。サービスで小石も一緒に。:極地的に大雪のち小石:

2ピッチからは、『かぶってんじやないっすか』って感じだけどホールドはでかいので大胆に行ける。ラスト1ピッチで後続のトップが登つて來た。あらら、鼻水垂らして眼鏡には雪がビッチリじやん、ホールド見える？そこの乗つ越し悪いよね！バイルで岩叩いてんじやん。その先にガバがあるのに。あー、ゴメン ゴメン俺踏んでるね。今ビレイ中だからさー、足離せないんだ。君ならその窮地を脱出できるよ。ガンバ！

終了点でなぜか自分のバイルですねをしこたま打ち付けテント場までビック引きながら帰りました。輪廻転生

(吉田 記)

八ヶ岳 “赤ちゃん” 登山

2002.12.23

パーティー L 木村 一、金沢 清、石川 泰士

ACC-J茨城に入会してほぼ一年になります。土浦のガストで会の皆さんに始めて会ってからもうそんなに時間がたったのか…と思いますが、会の山行にはほとんど参加出来ない一年でした。

この冬こそ、と一念発起。会の冬山訓練に参加させてもらうことにしました。冬山のピークに立つのも、冬山で一夜を過ごすのも初めてという事で、ワクワク！ちょうど大学も休み前と言うことで、“存分に楽しんで来よう！”と息巻いて八ヶ岳に挑みました。

入山前日の天気は大荒れ。中央高速も相模湖を越えるとチェーン規制で渋滞する始末。Delicaは他の車が雪にたじろぐ中、雪夜を八ヶ岳に向か順調に進行。吹雪になつたらどうしよう等という不安よりもどういう訳かワクワクが止まらないという感じです。

大雪で本来予定していた地点まで車で入ることができなかつたため、翌朝の歩き出しへ標高のやや低いところからとなりました。無知というものは怖いものです。僕は夏と同じペースで体が少し熱くなる程度のスピードで歩き始めました。張り切りすぎていたのでしょうか。厚着をしている分、汗がよく出るのです。しまいには一時間ほどで汗だくになつてしましました。しまった！と思ったのは休憩のときです。汗を吸い込んだ衣類が徐々に冷え、体から熱を奪つてゆきます。これも経験か？と内心反省。休憩後はなるべく汗をかかないように歩くことを心がけました。

南沢大滝に行くパーティーとは別れ、木村隊長、金沢料理長、石川の三人は一足先に今日の目的地に向かいました。別れ際、木の枝を拾うように木村隊長に言われました。最初は木の枝を何に使うのかもわかりませんでした。木の枝の用途を聞いてみると、ペグの代用品として使うとのこと。こんなものでテントを固定することはできるのだろうか？半信半疑で言われるまま拾いました。

だらだら続く樹林帯に嫌気がさした2時頃、ようやく行者小屋に着きました。テント場はたくさんの登山者でにぎわっています。何やらビーコン訓練をしている人達も。小休憩の後、さつき拾つた木の枝も使って、テント設営。大滝パーティーが帰つてくるまでしばらく時間があつたので、テントの中でのんびりしようということになりました。

普段、集会で会うことはあっても長時間に渡つて一緒にいることがなかつたので、木村さん、金沢さんとテントの中で話せたのは嬉しかつた。正直、自分の父親と同年代の方と何を話せばいいのだろう？と戸惑つていました。そんな心配は無用。木村隊長と、金沢料理長が話してくれる若いころの山の話に僕はすっかり魅せられてしまつた。暇があれば山に登つた…。あそこで雪崩に巻き込まれたよなあ…。聞いているだけでワクワクしてきます。凄いなあと思ひました。二人の話を聞いていて僕はうらやましいと思いました。

夜。いつのまにか空を覆う雲は消えていました。隠すところなく広がる星

空のしたで、眼前に大きく迫る八ヶ岳の影は静かに眠っているようです。

明日は晴れるぞ!!

名雪さんから頂いた焼酎で体が少し熱い。僕はなんだか楽しい気分のままシュラフに入りました。

翌朝。気持ちのいいくらいに晴れ渡っていました。放射冷却のせいで、そうとう冷え込んでいます。山頂付近を見上げると、雪煙がかなり早いスピードで舞っています。風が強い。

体中に心地よい緊張感が走ります。いよいよだな!

他のパーティーを見送り、僕らも8時ごろ赤岳に向けて文三郎尾根を登り始めます。去年、茨城県岳連の冬山講習で教わったアイゼン歩行を思い出しながら、慎重にゆっくり登りました。僕の前と後ろには心強いベテランが歩いてくれています。時折木村隊長に歩き方を教わりながら、順調に稜線上までたどり着きました。稜線からは遠く、穂高の頂も見えます。雪をかぶった山々はこんなにもきれいだったのか…。感動もそこそこに稜線上を歩き始めました。

足場はだんだん悪くなっています。岩が露出してくると、アイゼンに引っかかるようになりました。もし引っ掛けたら…。そう思うと否が応でも緊張してきます。さらに風は速度を上げ雪を顔に吹き付けます。目も開けずらくなってきました。悪天候で疲れがたまっていたら、一瞬の不注意でアイゼンがひつかかってしまうでしょう。慎重に、慎重に…。

緊張で顔が引きつりそうな僕とは対照的に、金沢料理長と木村隊長は何事もないかのような表情です。やはりこの人たちは普通の人ではない!!スゲーやあ。僕も経験をつんで早くこうありたいものだなあ。

下りになると、雪に体のバランスが奪われフラフラでした。山頂を越え、天望

荘の付近にくると風が強い強い。休憩せずに早く下山してしまおうとの木村さんの判断で僕らは山頂からの展望を楽しむことなく下山することになりました。地蔵の頭まできたときでした。

『石川、こっからが本番だからな!!』木村さんの強い口調に僕も気が引き締まります。地蔵尾根は稜線付近までくると岩が露出し危ないとのこと。鎖を使って慎重に下山します。震えそうな手に力を入れ、そろそろとおります。

笹平さんや吉田さんの様に…といふわけには行かないけど、いつか俺も!冬の寒空にさらけ出された八ヶ岳の岩肌を見て、そう心に誓いました。

(石川 記)



鹿島槍ヶ岳東尾根（貴重な敗退記録）

2002.12.31～2003.1.4

パーティー L 笹平 孝、吉田 仁、渡辺聰子、名雪博二（ACC-J東京）

平成14年も押し詰まって、大晦日の前の晩つくば市役所に20時集合、4人で、鹿島部落を目指す、真夜中スキー場の大駐車場に到着、カンピールを飲んで早々に仮眠。

12月31日

明るくなる頃出発、アプローチの林道を行く、小さい右カーブでイヤと言うほど右に赤布が垂れ下がっている、此処が東尾根の登山口だ、いきなり急登だ、昨日まで天気は荒れ気味、しかも今年の積雪量は例年より遙かに多いとの情報が入っている。やがて東尾根の稜線末端に出るが、トレースははっきりしてかなり入山者は多いと思われる、しかしもう既に何パーティーかが下山してくる、気を使ってこちらが、明るく挨拶をするが、何かふてくされ気味で明るい返事が返ってこない、いち早く頂上に抜けて、意気揚々と引き上げてくる感じではない、何か暗い雰囲気で降りてくる。この日は一日小雪がぱらつき明るい入山の日と言うわけには行かない、1ノ沢ノ頭まで久しぶりの重荷に嫌気がさしてくる、直ぐ隣の天狗尾根も雪とガスでよく見えない。ここが我慢のしどころとがんばり、やっと2ノ沢ノ頭に着く、此処まででもう体力の限界を感じた。ここには大きな雪洞があり、こりやーうまくすると、この雪洞に泊まれるかなーと思い覗いてみると、なんと、まだ荷物がいっぱい入っていて使用中だ、仕方なく近くの雪面を切ってテントを張る。

今日は大晦日、早速入山を祝して

大宴会が始まる、食事の支度をしている頃、隣の雪洞のパーティーがヘッデンを点けてジャンクションピークの上から下降してくる、よく見るとこの上の屋根型ノ頭、にもさらにその上のジャンクションピークにも天幕があるようだ、みんなこんな所でなにしているの、と思いながら疲れて寝ちまた。

1月1日

さあ、今日はいい天気だし、いよいよ核心の1峰、2峰を抜けて鹿島槍の頂上直下にテントを張って晩は又大宴会だなー、と思っていると、となりの雪洞の連中は、暗い中ヘッデンを点けて可成り早い時間にでかけてしまう、雪洞を覗くと何と、まだ全装備を持って行つて居ない、変な登り方をするなーと思いながら、明るくなつて出発だ、上部の天幕も出発しているが、天幕は張つたままだ、この尾根は変な登り方をする奴が多いなー、ま、いつか。んで、1峰の取り付きにいくと、やっと1ピッチが始まつたばかりだ、この取り付きで、いやつうほど待たされて2ピッチで1峰を抜ける、ここから見ると3パーティーが先行している、先行パーティーは猛烈なラッセルをしているようだ、1峰の2ピッチ目からは、トレースが無かったようだ、我々は4パーティー目、天気は上々今日中には2峰を抜けるだろう。しかし先行3パーティーは何れも、登攀装備のみで軽装、下手に前に出てラッセルしたらへばってしまうので、このままトレースを使わせて貰う、そして2峰の取り付きに12時前にやつ

とたどり着く。暗い内に出発した雪洞パーティーが今日の東尾根トップパーティーだ、彼らがやっと登攀の支度をしているところだ、それを他の2パーティーがのんびりと見ている。

このトップパーティーは、去年の冬、横尾尾根で逢った九州大学の学生とO Bとのことで、今回は12月の25日だか27日から東尾根に取り付いているとの事である、とてもじゃないけどこのパーティーでは今日中には抜けられ無い、と判断して早速雪面を切りテント場を作る、またまた大宴会。テントの真ん前では先行パーティーが敗退、2番目パーティーが取り付く、薄暗くなる頃1ピッチ50メートルで2峰終了点にやっとトップがたどり着き、2人目を引き上げヘッデンを点けて下降してくる、3パーティー目はもうあきらめて既に下降してしまった、残るは、我々と、1峰の取付で追いついてきた単独のみ、この人は終始我々の行動と併せていました。決して前に出ようとはしなかった。夕刻から風が強くなり、雪も降ってきた、何回かテントの廻りの雪かきを繰り返し、酒もそこそこ飲んで1月1日、元旦は寝ちまう。

1月2日

積もった雪で朝からテントが潰れそう、雪は相変わらず降っている、風がイヤに強く成っている、気温が下がつて居る、登攀にはちょっと、いやーな天気、少し様子を見ようと言うことで、あんまり暇なので、笹平リーダーが、完全装備で、スコップを持ち、雪洞を掘ってみると、テントから出ていった。暫くして俺も、スコップとスノーソーを持って行ってみると急斜面に横穴が出来ていて、じつとしていると寒くてたまらないので俺も頑張って掘り進める、そのうち立派な雪洞完

成。此処で雪洞堀り教室だよ
雪洞は殆どの場合、横穴を掘ってから左右の壁を掘り進めるんだけど、この時左右の壁の一番下の段から掘り出す、この一列を掘り出してしまえばその上の段はスノーソーで切れ目を入れちょっとスコップでさわるだけで、自重で落ちてくる、こうすると非常に効率がいい、こうして左右を掘って行き正面もこの手を使えば以外に早く、大きな部屋が完成する、これも笹平リーダーのアイデアだぜすんごいだろー。

ちょっと入り口が大きく寒いけどテントのばたばた、と雪かきの連続よりは良い感じ、何と言っても広いし天井も高い、早速引っ越し、寒いけど風の音が無く、ローソク1本で明るいし、何か酒も旨い、夕方少し風雪穏やかになる、2550メートルのこの地点に昨日の昼前から釘付けにされている、天気予報は相変わらず悪い、ま、とりあえず又大宴会で今日を終わる。

1月3日

朝天気を見てつっこむか、敗退かの判断をしなければならない、むちやくちや悪い天気ではないが、かといって、とても登攀日和ではない、ちょっと時間が長く掛かれば凍傷は免れない。風も相変わらず吹き上げている、雪もちらちら、おまけに天気予報は昼から荒れそうなことをほざいているし、行動は午前中のみとのことだ、此処で笹平リーダーは断腸の思いで敗退の決断を下した。

下降、と決めて見ると昨日からの降雪で殆どトレースが消えて無くなっている、僅かなトレースとおぼしき雪面の変化を拾い、記憶と感覚で、慎重に下降する、2ノ沢ノ頭まで降りると、もうジャンクションピークあたりはガスって何も見えない。

林道に降りた頃には本格的に雪が降

り出した。車に戻って大町のでっかいスーパーの駐車場で、正月と、命を長らえたお祝いで、ビールじやんじやん飲んで、料理喰いたい放題、と、やっていると、昨日からの大雪がさらにドカ雪に成り、この駐車場も見る間に真っ白に成り、中央高速、関越高速、長野自動車道などが、軒並みチェーン規制となり、直ぐに一部通行止めとなっていく。今朝敗退する時は、もうちょっと根性入れてつっこんじやえば何とか抜けられんじや一ねーかなー、なんて、一抹の未練を残したり、頭の片隅に有ったけど、夕方からこんなにどかどか雪が降って来るんでは、つっこんでたら最後、今頃鹿島槍のてっぺんで、泣きが入ってたんべーんで確実に遭難してたよなー、つくづく笹平リーダーの判断の良さ、センスの良さが、4人の命を救ったのですねー。

こっからは渡辺リーダー自からの運転にて、茨城はつくば市役所に無事到着したので有りました。

ついことで、今年の正月合宿は見事に敗退しました、でも今年は暮れから正月に掛けて東尾根はだーれも頂上に抜けた奴はいねーツーことだから、しうがねー、あきらめんべー。

でもこんな事やってるといつか死んじやうぞー、笹平リーダーについて行かなきやアブネーぞー。
笹平ーつ今度どっかで飲むべー。名雪より。

(名雪 記)



鹿島槍ヶ岳東尾根にて 吉田、渡辺、名雪

上州武尊岳川場尾根

2003.1.12～2003.1.13

パーティー L 笹平 孝、渡辺聰子、

正月山行の後だったので、ちょっとぬるめの山を探し上州武尊岳の川場尾根にたどりついた。地形図を見るとスキーで十分くだれそうなので板を持っていくこととなった。

現地に着いたときは満天の星が広がっていたのだが、目が覚めてみると空はどんどんよりとしており、小雪舞う中での出発となった。他のパーティーがいるはずも、当然トレースがあるはずもなく、膝までのラッセルを交代しながら尾根へあがり、さらに尾根上を前武尊岳へ向かった。

実際に尾根を歩いてみると尾根幅はさほど広くなく、快適な滑降ができるような感じではなかったので、わざわざスキーを持ってきたことを後悔はじめる。次第に風は強くなり、視界もあまり無い中、黙々と足を進めた。途中の岩場は雪の付き具合のせいか、ちょっと緊張した。笹平さんにほとんど担当してもらったのだが、下からのラッセルはけっこうきつく、ようやく前武尊岳についたときには、疲労困憊、ばてばてだった。整地してテントをはり、一息つく頃には雪も風もおさまり、夜はさほど寒さを感じずに過ごせた。

目出帽が欲しくなるぐらい風は強かったが翌日は快晴の中、武尊岳頂上を目指した。トポを書いた人達は途中の岩場に臆することなく稜線通しに通過したようだったが、岩場は非常に悪く見え、簡単に岩の基部をトラバースできそうだったので、迷うことなく巻いた。

行きはなるべく稜線通しに行こうと、交代でラッセルを繰り返して武尊岳の頂上を踏み、360度の展望を楽しんだ後、帰りは前武尊手前までトラバースして戻ってきた。

前武尊でテントを撤収し、スキーをはいて下山である。一度スキー場へ出た後に、樹木の密な稜線を滑り、さらに沢へと降りた。樹木は濃いし、雪はぐさぐさだし重いし、板は滑らないし、快適な滑降とはほど遠い、三重苦、四重苦の下山であった。もしかしたら歩いたほうが早かったのかもしれないくらいだ。四苦八苦しながらもなんとか下まで滑り降りてきたのだった。ぬるめの山と思っていたのだが、武尊岳あなどれん・・・。

(渡辺 記)



古賀志山西稜（中高年ハイキング）

2003.1.13

パーティー L 菊地光夫、本団一統、木村 一、名雪博二、金沢 清

お正月気分もやっとぬけていつもなら茨城の仲間でゲレンデスキーにでも行くのがこの時期のパターンなのだが、去年の秋に本団氏が足をケガしてびっこをひいてて何10年ぶりかで正月合宿も行かないでリハビリにはげんでいるようだがものたりなくていまいちのようだったので足慣らしに古賀志山の西稜にでもハイキングに行ってみようかと話しがまとまる。

古賀志山は茨城からは近く早朝に出発で十分に間に合うので我々茨城の3人は茨城を朝出発する事にして、東京のパーティーには古賀志山の入口で待っていてくれるように連絡を入れておいた。

東京の2人は前日の夜より来ていたようで寒い中、名雪司令長官所有の赤帽仕様の軽トラの荷台(幌の中)で寝ていた。まさに走るベースキャンプと言った感がする。

東京のメンバーと合流後、木村氏が軽トラのハンドルをにぎり林道をつめ1台の車を下山口に置きもう1台の車に全員が乗り西稜の登り口の所より歩き始める。入口の所に看板あり30分も歩くと正面に大きな岩があり右側の急な斜面を登ると、小高い丘みたいになっていてパラグライダーの発着場になっており次から次へと飛んで行く、登山道から少し離れた所にトロッコ電車のレールがありパラパラグライダーをやる人はこれに乗って登るようだ。1回の乗車料は高いのかなーと思いながら若い女の子の飛ぶのを横目で見ながら、

東京の2人組は朝食を作る事になり昨日買って来た焼きそばをフライパンで温め食い始める、それを見ていた木村氏が『清ちゃん清ちゃん仲良くしようぜ』といつものパターンでゲット、それに名雪連合艦隊司令長官が前日栃木の鶏卵場が売っている新鮮な卵を1人で目玉焼きを作り焼きそばとあわせての豪華な朝食をとっていると箸をなめなめ、卵焼きは俺に任せろとわんばかりに卵を割ると卵の黄身がポッコリとしていて新鮮そのものだった。彩ノ国の大給官僚N氏が安い買い物で得した気分だとぶつぶつとつぶやいていた。午前中は風も穏やかでパラグライダーもあまり高く上がらず少しすると下へ降りてしまうようだ。パラグライダーの女の子のお尻をしばらく眺めてから登り始める。一度は若い女の子とタンデムフライトをして見たいと密かに思いながら少し歩くと稜線になり、岩が適当にミックスしたなかなか面白い尾根歩きである。1時間もすると古賀志山の山頂に着きここで昼飯になりまたフライパンを出し木村氏が『名雪さん卵うまかったから残り全部食べちゃおうよ』と箸をなめなめ説得していた、このころから風も少し出てきてパラパラグライダーの人達も空高く飛ぶようになり我々の上空にも来て、エールを送っていた。のんびりと大休みしてから車の所まではゆるやかな下り坂で30分位で到着した。『本団さん足のほうはどうですか？』『うーんだいぶ動くようになってきたがまだ下り坂では足がいたいようだなー』

お天気はいいのだが風があったので車の脇でなく途中の日向のよい竹やぶ

の所で正月の残り物のお汁粉と焼餅パーティー。数十年付き合ってきた名雪連合艦隊司令長官がお汁粉が大嫌いと初めて知った。山に入ると親の仇でも取るみたいに何でも胃袋の中に入れてしまう名雪司令長官に嫌いな物があったなんて。次回の山行が楽しみになってきました。名雪司令長官曰く『お汁粉は死んだ親父の

遺言で食べない事にしている』との事だが、本当の遺言は『アルコールは控えめにしろ』との噂がある。誰に強制された訳ではないが1年365日アルコールを欠かしたことが無い名雪司令長官は親不孝者だと思うのは私1人ではない筈だ。酒と早には目が無い名雪司令長官と日帰り温泉に入りリハビリ山行は終了した。

(菊地 記)



古賀志山で憩う
金沢、木村、名雪、本図

梨沢・七つ釜渓谷

2003.1.19

パーティー L 本図一統、吉田 仁、渡辺聰子

房総の沢は、二度目だ。前回は本図さんと二人でキンダン川に入った。(R&V 35号参照)

かなりの困難を要した沢だったけど今回はどうかな? (入渓が、) 成田経由の下走りで梨沢部落にオンサイト成功。やっぱり房総はちょっと暖かいかな?

朝は、のんびりスタート。現地人に場所を確認してみると、もう少し車で入っていけらしい。

まあ一、今回は歩きトレーニングだからいいでしょ。知らない村を、犬に吠えられながら歩くのはなんとも情緒があってとてもよろしい。いろいろ道ばたのものを物

色したり、キジうちしたりで、小一時間かかったんだろうか? 民家の裏庭から梨沢にチャポンと入った。しばらく行くと、川底は岩盤で壁は黒い土壁、いわゆる房総ゴルジュになり大滝が現れる。言わなければ、ふつうに通り過ぎちゃいそうな箇所だけど房総の沢からしたら貴重な存在である。そしてこの渓谷の名前にもなっている七つ釜のセクションに入る。しつこいようだが、この言わなければ普通に通り過ぎちゃう釜だって!。房総の沢からしたら貴重な存在である。そしてそれ以上に、この沢を遡行する人間は貴重な存在である。

(吉田 記)

谷川岳西黒尾根（初めての雪山登山）

2003.1.18～1.19

パーティー L 笹平 孝、石川 泰士

一昨年まではTVで流れる雪山遭難のニュースに、僕も理不尽を感じていた。今は、…どうなのだろうか。冬山に登ろうとする今でさえそう思うことは多々在る。自分の生命の危険を冒してまでやらなければならぬ、大切な何かが冬山にあるのか？まして、僕は植村直己のように登山家を目指すわけではない。いつかはマッターホルンに登ってみたいと思っていても、それは夢のような話だ。家族や親類に迷惑をかけてでも登る必要があるのだろうか…？

そんな想いとは裏腹に、やはり僕は冬山へと向かう。何かに浮かされたかのように。ふわふわと吸い込まれるように。

そんな中途半端な気持ちのまま向かった今回の山行では、自然の恐ろしさ・人間が作り出した知恵、そんなものの凄みをリアルに感じたのだった。

新年一回目の山岳会のミーティング。僕はこう切り出した。『訓練がてらどつか連れてって下さいよ』。岩登りの技術的がまだ不十分な僕は、他の会員が行くようなMIXルートには挑めない。歩行がメインのルートに連れて行ってもらう。昨年は安達太良山、八ヶ岳赤岳に登らせてもらった。これらの山はアイゼン歩行とピッケルの使い方さえわかっていないればリーダーの下で挑戦できるコースだ。

環境面での厳しさだけではない。冬山登山は体力的・精神的にも相当

ハードだ。雪の中を歩くことを経験したことがある人ならばわかるだろうが、非常に歩きづらい。雪に足が埋まるのだ。埋まるのは足だけではない。雪が深ければ、胸まで埋まることもある。時には体をもがくようにして雪中を進むこともある。また、氷上（稜線上では強い風のため雪が多くは積もらない。雪面が氷化する。）の歩行も難しい。ツルッと滑つたら、滑落する。氷の上ではアイゼン（登山靴に付ける鋭い爪）を用いての歩行になるが、これがなかなか難しい。何しろ靴底に歯がついているので、岩稜帯などでは、岩やヤッケ（防風用のカッパ）に引っ掛けてしまう危険性がある。やせ尾根など最悪だ。アイゼンを岩に引っ掛けないよう、体のバランスを崩さないよう慎重に歩く必要がある。自分のもつ技術力が試される。

僕と一番年齢が近い会員は三十歳の笹平さんだ。訓練山行のリーダーをお願いすると笹平さんは快く引き受けてくれた。そして“谷川岳西黒尾根”に連れて行ってもらうことになった。

僕は谷川岳に登るのは今回が初めてだ。とは言え、その姿は何度も写真で見たことがある。大きな岩が力強く荒削りにそびえ立つ谷川岳一の倉沢の写真だ。夏の谷川岳一の倉沢と言えば関東のみならず日本中からクライマーを集める岩場として有名だ。一方、冬の谷川岳は岩の厳しさもさることながら気候の厳しさ（積雪量が多く、天候が不安定）から登攀が大変に厳しく其処に敗れ去ったクライマーも多い。その谷川に冬に登ると言うからびっくり。『僕でも大丈夫で

すか?』との問い合わせに笹平さんは『他の山岳会でも新人訓練として行くようなコースだから問題ないよ』という。話によると厳しい岩場がある東尾根方面ではなく今回はその隣の尾根を登ること。僕はてっきりあの岩場(一の倉方面)を登るのかと勘違いしてしまった。

当日の天気は晴れ。ちなみに僕が山に入るとほとんどの確率で晴れている。90%は晴れる。やはり僕は晴れ男なのだろうか。頭の片隅に母親の言葉がまだ残っていた。生きて帰って来れます様に。そう祈りながら登りはじめた。

天神平スキー場ロープウェイ乗り場から道を右に折れ、入山する。話に聞いていた通り雪が多い。胸まである。前日に入山した人も居ないのか全くトレースがない。『コリヤ全部ラッセルだな 大変だぞ』 笹平さんの言う様に大変な行程になつた。天気がよい分かなりマシだとは言えるが、それでも今の僕にとっては相当ハードだった。ロープウェイ乗り場から見える鉄塔まで一時間半もかかってしまった。僕がまだ雪に不慣れなこともあって、笹平さんは丁寧に指導しながら登らせててくれた。

すぐ息を切らす僕とは対照的に 笹平さんは息も切れていないし、汗もかいていなかった。まだ先は長いから、と言われたが慣れない雪に一生懸命格闘しているうちにすぐ汗をかいてしまう。程なく僕は疲れてしまった。夏ならば、体力面で相当自信があったはずだった…。が、これほどまでに違うものなのか。自分の自信過剰がよくわかる。最初は楽しんでしていたはずの歩行が苦痛に感じてきた。そしてだんだん精神

的な余裕はなくなってくるのであった。

本来ならば、雪を崩して道を作るパートナーの先頭は非常に疲れるため交代制で行うところなのだがほとんど笹平さんが一人で道を作っていた。僕は後からただただ、下に向いてくつづいていくので精一杯になっていく。情けない。お昼を過ぎたころからだろうか、尾根が痩せ、岩が露出してくる。そのころになると 笹平さんは僕とは対称的に疲れも見せずどんどん道を作りながら先へ進んでゆき、姿が見えない。実際はすぐ近くに居たらしいのだが、彼との距離がとてもなく遠く感じられていた。

一人きりになって、疲労感から緊張が抜けてくると、急に恐ろしさが心の奥底から湧き上がって来る。頭の中では母親の言葉がリフレインし始めていた。『雪山で死んだら親不孝ものなんだからね』。そう、だよなあ。今、現実にもし足を一步踏み外せば痩せ尾根から落ちて死んでしまうだろうなあ。俺どうしてこんなところにいるのかな…。やばい。ぼんやりしてきた。余計なことは考えるな。前を進むことだけを考えろ。

しばらく頭の中はこの問答の堂堂巡りだったらしい。体の感覚も高度感でふわふわしている。しばらくするともうそんなことも考えられなくなつて、次の一步を踏み出すことと、ピッケルを雪に差すことが生きることのすべてに思われていた。体中が重い…。

“ボンッ！！！！！！！”

一瞬何が起きたかわからなくなつて、いた。前を歩く 笹平さんも『アッ』と声をあげた。僕たちが歩いているトレースに一本のヒビが入っている。僕らは雪庇の上を歩いていたのだ。これほどまでに頭の中が混乱したのは初めてだった。僕はもう無我夢中で 笹平さんに『どうしたらしいんですか?』と泣き叫びたい気持ちで繰り返していた。 笹平さんは冷静に

『谷側に1mくらいはなれたところを歩いてくれば大丈夫だから。あと、もう少し僕との距離を開けてね。』と言った。初めて感じる命の危険。少し大げさかもしないけど、そのときは本当に死ぬかと思ったのだ。

しばらくは何も考えられなくなっていた。興奮が冷めてくると、次第に死が身近に感じられてきた。だが不思議と怖さはない。死ぬ時は死んでしまうのだろう。しようがない。その程度だ。死への覚悟とも言えるだろうか。ただ、中途半端な気持ちで冬山にきたことを深く反省した。僕は、自分がなぜ山に登るのか、そう考えながら次の一步を踏み進める。ここまで危険を冒して山に登る理由は…?

そのころになると、ホワイトアウトで視界が遮られていた。目を凝らしても空と雪面の見分けがつかない。全く吹雪いでいなかったから、おそらく山頂近くのこの辺りだけガスが掛かっているのだろう。灰色の世界。呑み込まれそうだ。恐ろしさは消え、気力が満ちてきた。冷静さも取り戻していたように思う。しかし、このガスの中でどちらの方向に自分が今向かっているのかはまったくわからなくなっていた。山頂非難小屋はなかなか見えてこなかった。笹平さんが道迷いをしているのではという疑いが生まれては消え、生まれては消え。暗中模索、疑心暗鬼。笹平さんのトレースを信じるしかなかった。それが今できる最善の方法であることは明らかだ。一歩一歩進む。時間がとてつもなく感じられる。笹平さんは地図とコンパスだけを頼りに無事僕を頂上の避難小屋にリードしてくれた。

小屋に着いて、笹平さんはこう言った。『今晚中にもしかしたら小屋にはつけないかと思っていたけどさ。ま

あ、そのときはビバークでもすればいいと思っていたよ。そんな、遭難とかは心配してなかっただけ。けど、本当にホワイトアウトは怖いよ。自分の判断能力を疑うのはもちろん、時々コンパスでさえ信じられなくなることがある』知識と経験は強い。いつどんな状況にいても、冷静な判断が下せる。僕は笹平さんという先輩を心強く思った。そして自分の未熟さを痛感した。

青森県岩木山に登った高校山岳部の遭難についてのドキュメントを以前テレビで見たことがある。再現VTRで流れたものと同じ、灰色の風景が僕の目の前に広がっていたわけだが、この状況で経験と判断能力と体力に劣る高校生に何ができたのだろうか。遭難した高校生の姿が自分とダブって感じられた。

翌朝はすばらしい天気だ。担いで登ってきたスキーを駆使して天神尾根を快調に下った。深雪にバランスを崩して転げ落ちる。気持ちがいい。途中、山頂から西黒沢に一気に下っていったスキーヤー（五十代のおじさん）がいた。標高差800mはある。すげーやあ。

冬の山が持つ二つの顔を体感した今回の山行。僕は登山者として、何を求めて冬山に入るのだろうか。命の危険を冒してまで得たい大切な何かがそこにあるのだろうか。

きっと僕はまた冬山に登りたいと思う。もっと冬山のことを知りたい。

そのためには努力しなければならないと痛感するばかりです。

（石川 記）

リハビリ山行のハズだったが・その1（鼻曲山）

2003.2.2

パーティー L 本団一統、吉田 仁

15年ほど前、スキーで右膝前十字靱帯を切った。そのときは保存療法で治した。ちょっとした加減でガクっと外れるような感じがあり、それ以来コブ斜面は恐くて滑れなくなつたが、山はそれなりに登れていたので、そんなに不便さは感じなかつた。去年の9月23日、オツルミズの帰りに不覚にもつまずいて転倒し同部位を捻転した。以後、山にはまったく登れず療養すること4ヶ月が経過した。

1月にはウォーキングも再開し、ゲレンデスキー1回と古賀志山や梨沢ハイキングもなんとか無事にこなした。今度は、いよいよ本格的にトレーニングを始めようと計画した山行である。こんな山行に吉田が付き合ってくれるという。仲間とはいいものである。私は雪道を歩けばいいのだが、吉田は今年から始めたスノーボードを少しでもやりたいハズである。折衷案として午前中山登り、午後ボードという計画ができあがつた次第である。

登山口となる軽井沢スノーパークというスキー場は会員制で、ゲレンデに入るのに入場料を取られる。中に入ればリフトはタダである。こういうシステムのスキー場は初めての経験であった。ゲレンデに入ろうとすると、お姉さんが寄ってきて「今日いらした方は幸運な方々です」

「ジャックスのカードを作っていただければ今日の入場料は無料です」と言う。二人とも迷わず申し込んだ。タダでゲレンデに入りリフトに

乗ろうとしたら「登山者は乗せられない」と一悶着。しかしそこはそれ、顔のいい俺だからすぐに解決できた。顔のいい男と無細工な男の差は、こんなところにも現れるのだ。吉田に感謝されながら、また美男子に生んでくれた親に感謝しながら上を目指す。

リフト終点から登山道に入るとトレールはない。トレーニングに来たのだから望むところである。ワカンをつけて歩きだす。急斜面で腰くらいのラッセルになると足は上がらないし、蹴り込むと痛いし、辛いときもあったが2時間弱で頂上に着いた。二人だけの頂は静かで気分が良い。眺める浅間山は噴煙がすごくて、この状態ではガスが恐くて登れないだろうと思えた

(翌日に小噴火があったと2日後の新聞に報じられた)。あとは往路を戻り、各々スキーとボードを楽しむだけだ。午後から7~8本滑ったろうか、私はそれ以上膝に負担をかけたくなかったので、吉田より一足先に終了とし、温泉に入ることにした。入浴料800円だったかな?私の許容範囲を越えていたが背に腹は変えられなかつた。吉田はリフトが止まるまで滑ってきた。

(本団 記)

リハビリ山行のハズだったが・その2（浅間隠山）

2003.2.11

パーティー L 本団一統、吉田 仁

今日も前回と同じく登山＆ボード山行である。目指すは鼻曲山から見えた浅間隠山である。10数年前、3人の女性を引き連れて、角落山と剣の峰に宴会山行に来たことがあった。あ～あ！あのときは両手片足に花だっけなあ！あのころは良かったなあ！・・・本当のことを言うと、決してモテテいたわけではなく、たまたま行く人がそういうメンバーになつただけのことなんだけどね～。浅間隠山はそのころから気になる山の一つであった。

今日の天気予報では、まもなく雪が降ってくるはずだ。降水確率も高い。二度上峰の登山口から登り始めるが、トレールがバッチャリついている。これじやワカンはいらないと一旦車に戻りワカンを置いて再出発となつた。鼻曲山より行程は長いが、ラッセルがないので楽である。これではトレーニングにならないと思いながらも、今日は天気との勝負だからこれでいいのかもしれない。頂上

手前の急斜面でアイゼンをつける。これも膝の具合をみるためである。頂上はまたもや我々二人だけだったが、やがて地元のおじさんがやってきた。この天気だから展望はなく早々に降り始める。アイゼンでの下りは、膝の負担が大きくて痛みがあり、完治はまだまだ先だなあと感じた。我々の着くのを待っていたかのように、車に着いたらパラパラと降ってきた。すぐに軽井沢スノーパークに移動する。

今日は二人ともすでに会員なので半額で入場する。はつきり言ってこのスキー場は規模が小さく面白くない。ファミリー向きのスキー場である。1時間も滑ると飽きてしまう。私は前回と同じく、少し滑ってから温泉に行く。吉田は、リフトが止まりゲレンデに人がいなくなったのに帰ってこない。心配になりかけた頃やっと帰って来て曰く「リフトが止まる時間が早い」と。さらに「今年中には山ボードをやるぞー」と息巻いていた。

（本団 記）



リハビリ山行のハズだったが・その3（仏頂山）

2003.2.23

パーティー L 本図一統

2月からクライミングジムでの練習も再開した。しかし膝の経過が自分でもイマイチ納得がいかない。重く鈍痛が常にあり、8キロのウォーキングも中止したりすることが多くなった。自慢だった大腿4頭筋の盛り上がりも、この5ヶ月間に消えうせ、見るも無残にやせ細ってしまった。気長に構えていたつもりだが、さすがの私も焦りを感じるようになってきたのである。膝の回復状態を自分でも知りたかったこともあり、一人で仏頂山、高峰、雨巻山の3つのピークを連ちゃんしてみようと思った。

ヒメハルゼミの発生地で知られる楞嚴寺（りょうごんじ）の駐車場から歩き始める。足が重く膝に違和感がある。登山道は長い階段が続くのであるが、なるべく両足に同じ負荷がかかるよう歩く。つまり右膝をかばって歩かないということ。

頂上に着いたときは、痛みが今までの山行以上にあった。やっぱり調子が

悪いようだ。「どうしてお前はこんなことになってしまったんだい？今までだいぶ酷使してきたから少し休ませろと言っているのかい？」と独り言を言いながら膝を撫でてやる。頂上には丁度良いところに、カメラの三脚の代わりになるような木のザク又があり、そこにカメラをセットして記念撮影をする。下りも両足に同じ負荷をかけて降りるが、ますます痛みが強くなり、駐車場まで約500mという地点で、ついに歩けなくなってしまった。ストックを2本ついてやっとのことで車に戻った。高峰や雨巻山など行けるわけがなく、そのまま家路についた。

この山行で精密検査を受ける決心がつき、MRIなどの検査をうけることとなった。この時は、この後さらに数カ月の療養をしなければならなくなるとは思ってもいなかつた。

（本図 記）



平標山 山スキー

2003.3.16

パーティー L 笹平 孝、吉田 仁、渡辺聰子、名雪博二、松原丈夫

今回は単独ではないので、松原社長と川越で待ち合わせて、豪華に関越高速を飛ばす、月夜野で降りて三国峠を越え、トンネルの出口にて、茨城メンバーを待つ、やがて合流、三国小学校へ、車を止めカンピールを飲んで、直ぐ寝る、快適。

3月16日

薄暗い内から、車が出たり入ったり、此処では朝は何となく落ち着かない、早々に出発、朝飯を食わないと、朝の出発が早い。別荘地のまっすぐな道路をシールを着けて行く、別荘地を抜けると直ぐにヤカイ沢の出合に出る。

後で解ったんだけど、ここからヤカイ沢に入れば良かったものを、素人の悲しさで、河内沢に沿って岩魚沢林道をまっすぐに行って、平元新道を登ってしまう、登山者にとっては好いルートだが、これだと下降ルートの確認が出来ない。小さな尾根状の登りを暫くすると、いきなり国境稜線に出る。

平標山ノ家の屋根の盛り上がりが雪に埋もれている、いよいよ平標山を目指しての登りだ。やがて頂上につく、空は晴れて風は強いがいい天気だ、右に仙の倉山、右奥に谷川岳、肩の小屋が見える、後ろには三国峠方面の山が続いている、頂上から直接急な斜面を降りる奴も一人居たが、俺はスキーは下手だ、みんなの降りている所を滑る。

頂上から登ってきた国境稜線を少し三国峠方面に降りて、広いヤカイ沢の左岸の大きな尾根を1500メートルぐらいまで降りてそこからヤカイ沢に入るルートだ。

この尾根のヤカイ沢側は北東斜面に成るので、素晴らしい雪質で、スキーが上手くなつたと勘違いしてしまう。

頂上からヤカイ沢と河内沢の出合までなんと30分ちょっとで降りてしまう、俺ほどスキーが下手な奴が滑ってもこの早さなんだよ、バカとスキーは使いようと言うことだね。平標山はスキーに最適な山です、でもちょっとスケールが小さいから今度こそ仙の倉山経由シッケイ沢のルートにしよう、登りはヤカイ沢を詰めて上部で右の尾根に出ること、早いよー。

そして車を止めておく場所は、ちゃんと平標山登山者用の駐車場が小学校のちょっと先に有るんだよ、三国小学校に停めてはダメだよ。帰りは湯宿温泉に、たむらのラーメンだよ、温泉とラーメンで450円だからね。出来れば帰りは下つ走りで、藤岡の大龍手打ちラーメン550円も喰いて一なーと思う。

どうもこここのところラーメンはスープにばかり力が入って、ま、それと、トッピングだよ、でも蕎麦でもうどんでもスペゲッティーでも、すべからく麺は、麺がメインなのよね蕎麦だって、うどんだって旨い物は塩をかけても、醤油をかけても旨いんだよね、いっぺん藤岡の大龍ラーメン喰って見な。トッピングなんて、薬味だよ、これだけで付加価値着けて高く売ろうってーのはいんちきだよ、やっぱりラーメンも、麺だよ、麺が良くなくちゃーだめだ

ね。それと、話は変わるけど山スキーは年に1～2回だけすごく上手くなつたと勘違いすることが有るんだよね、これは雪質なんだよ、積雪状態が好いとこうなるんだよ。

其れには2月～3月の時期がいいんだよね、4月5月の雪はもうざらめで、あのパウダーから比べると、全く比較にならないほどだめだめよ。

今年は2月1日の浅間山で500メートルぐらい、それに、2月15日の蓼科山でも600～700メートルぐらい、3月9日高峯スキー場の先、水の塔山で800メートルぐらい勘違いのオンパレードだよ。ふつかふかの雪を蹴散らして走れるんだぜ、スピードが出てくると雪煙が舞い上がるんだぜ。山ではボーゲンしかやらないこの俺がパラレルだよ、屈伸滑降じゃない

よ、パラレル、クリトリスだよ、イヤ失礼クリスチャニアだよ。大概こういう状態の雪は林間に多いんだよね、大分遅くなつて、3月23日の、今シーズン2回目の平標山のヤカイ沢へ下る尾根の北東斜面のブナの林も300～400メートルパウダーだったし、3月29日、日白山のブナ林もすんばらしかつたよなー。

そこでずーっと登山靴で滑っていたけど、道具より良いコンディションの、時期と山の斜面（ブナ林）を、見付けることだね、道具や、技術はあまり関係ねーんじゃーねーのか？と思いついたんだよね、もう山スキーのシーズンは終わったけど、来年は、ばうだーだらけだよ。

(名雪 記)



平標山頂上にて 笹平、渡辺、吉田、松原、名雪

谷川岳一ノ倉尾根

2003.3.21～3.22

パーティー L 笹平 孝、吉田 仁、渡辺聰子

冬の谷川は3本目だ。立体駐車場へ車を滑り込ませ、6階の床暖房の部屋で仮眠をとる。他にも沢山の人達が床に転がっている、何度見ても変な風景だ。一の倉沢出合についてみると、すでに滝沢リッジや東尾根の方へ向っている人達がいた。一の倉尾根はというと、星ルートにもかかわらず、人もいなけりやトレースもない。仕方ないのでラッセルだ。

一の倉沢に少し入ってから尾根に取付いて稜線にあがる。ところどころかすかに踏んだ後が残っている。おそらく先週のものだろう。交代でラッセルして進むがあんまり雪質はよくないなあ。

第一岩峰をすこし登ったところでロープをだし、さらにピナクル群のところを本来は稜線通しに行くのだろうが、悪すぎるということで岩の基部をトラバースしてから稜にあがつた。ここも足下は崩れるし、悪い悪い。雪の中から枝を掘り出して懸垂の支点をとし、さらにラッセルしながら進んだ。このころになると後続がわらわらと現れはじめ尾根はにぎわっていた。

懸垂岩までやってきたので、本日は終了とし、雪を掘って掘りまくってテント場を整地する。今回は会のツエルトを持ってきたのだが、あまりに古いものだったせいか、ピンと張ろうと引っ張つたら・・・破けてしまった。その後もあちこちツエルトは破け、なんだかなあつて感じである。幸いにも風もなく天気もよい夜だったからよかつたものの・・。我々の後ろにいたパーティーが懸垂岩のところにロープをフィックスしているですか、と聞きにきた。笹平さんが了承したので、明日は我々は2番手になることになった。

さて次の日、フィックスを張った先行さんが抜けるのに約2時間。ちと待ち疲れたかな。順番がやってきて実際に登つてみると、うーん、結構しょっぱい。核心の2ピッチを抜けると後はさほど苦労するところもなく、5ルンゼの頭にてて初めての一の倉岳頂上にでた。避難小屋も道標も雪の下で、何にもない緩やかな頂上であった。後はトレースを追って谷川岳を通り、天神尾根を下った。途中、小屋のところから沢において時間とお金の節約につとめたのであった。

(渡辺 記)



一ノ倉沢登攀中の吉田、渡辺

テレマークスキー入門編（モナカ雪は嫌いだ！・・の巻き）

2003.3.21～3.22

パーティー L 木村 一、江平 尚志、名雪博二

イラク戦争勃発の3／20（金）の夕方の便で一路羽田へ。連休前とあって空港も混雑している。テロ対策でかなり厳しい警戒の中、若干の遅れで羽田到着。ここからだ大変だ。

普段電車に乗らない私にとって、首都圏の帰宅ラッシュ時のそれは拷問の箱に等しい。本来、乗り物は楽しいハズでなければならぬと思うのだが、川越までの2時間、身動きが取れず固まっていました。

しかし、川越からは名雪連合艦隊司令長官の超快適「軽トラ」の荷台でお休みモード状態で、あつという間に新潟の小出インターを降りる。近くのコンビニで今日の行動食を調達し、本日の目的地浅草岳へと向かう。2時頃、浅草山荘の駐車場到着、荷台で小宴会後、就寝。

3／21（金） 浅草岳

簡単に朝食を済ませ、ホテル大自然館の先まで車で移動。7：00ホテル左側の尾根に取り付く。もちろん、シール装着。と、思いきや、名雪連合艦隊司令長官はツボ足である。シールを忘れたとの事。傾斜を選びつつ木村隊長と江平は、左へ。ツボ足の長官は右よりに直登して高度を稼ぐ作戦に出る。

名雪連合艦隊司令長官と木村隊長をみていると実に楽しい。無言のうちに先を争っているよう見えてしかたがない。二人とも、負けん気は人一倍である。1時間ほどバトルった後にたどりついた所は標高600mのピーク。この上にルートは無い。江平はど

のルートを行くのか全く知らないので、ここがルートを外れた事にも気づかず、休憩し写真を撮って一人ノーテンキモード。ルートを逸した事に気づいた二人は、ピリピリモード。『あっちだ。』『帰って宴会だ！』『こっちだ！』『行けるトコまで！』・・。結局下の反対側の沢を転がる様に下降し対岸の尾根を越え、ムジナ沢をつめて行く。

浅草山荘からのトレースに合流したのは、10：00頃。時計を持っていないのではなく、時間を記録する習慣が無いのです。あしからず。

ここから先は先行パーティのトレースで快適に進めた。大滝の手前で左の尾根への斜面へ取り付く。ここから先行パーティと合流し、尾根へあがる。このあたりから曇天も明るさを増し、雲も流れしていく。これから3日間、天候も安定してくれる予感だ。

前岳手前で昼食をとる間、明日の目的地の守門岳がその勇姿をみせてくれる。ここから先はバスして今日はここから滑降開始とする。テレマーク初デビュー戦だ。緊張の一瞬、ちょっと危なげターンであるがなんとか尾根を下降する。あれ！？、尾根からムジナ沢へ降りる先程の斜面に入った途端に「斜め前方デングリ返り」である。これがモナカ雪の難しさを知った最初のターンでした。あとはターンの度にゴロゴロとムジナ沢に転がり落ち、起きては又転びの連続。

名雪連合艦隊司令長官と木村隊長には幾度も足を止めさせ、転んで起き上がりれない江平を待ってもらい、すん

ませんでした。何とか浅草山荘まで辿り着き、苦いテレマークデビュー終了です。

音松壮大の温泉で初日の汗を流し、守門へ向かう「日ごろの行いが極めて悪い3人」の上には、真っ青な空と、真白き雪を抱いた峰々が『明日があるけん。』と囁いていました。

3/22(土) 守門岳

満天の星の下での宴会も終わり元気な朝立ちで三人はむくと起きる、多分4時頃。朝食を済ませ、あまりの天気の良さにテントを橋の欄干に干してから出発することにする。

6:00、シール登高で行動開始。名雪連合艦隊司令長官は、ツボ足なので先に出発済みである。すぐに硬い雪面の尾根に取り付き樹林帯をトレース沿いに進む。昨日のモナカ雪とは、ちょっと違う感触だが、上部はどんな雪質だろうか心配である。昨夜のアルコールのせいか、やたら喉が乾き水分補給の度に二人から遅れ始める。

保久礼小屋の鞍部に着いた処で、十分に休憩を摂り更なる登りに備える。尾根を登るにつれて、樹林帯が切れすばらしい展望が飛びこんでくる。汗でアルコールが抜けたのか、この大パノラマのお陰か、さっきまでの疲れが嘘の様に消えていくのを感じながらペースが上がったのだった。森林限界を過ぎ、群青と純白の2色の世界にスキー板で快適に高度を稼ぐ。

守門岳(大岳)のピークに着いたのは…、時間は………忘れた。覚えていない。

いつまでも見ていたい景色であるが、とりあえずカメラに記録し、行動食を放り込む。又、モナカ雪との戦いだ。腹をくくり、北のピークへ続く沢の斜面ヘテレマークで飛びこむ。

おんや?、昨日と違うバイ。今日はよかぞう~。北向きの斜面だからだろうか?ここは、モナカじゃない。これなら、今日は快適な滑降が・・と思ったのもつかの間。西方の保久礼小屋へ続く尾根の中間から、又、例のモナカ雪の洗礼を受ける羽目になったのでした。

しかし、「極めて、日ごろの行いの悪い3人」の前に女神が現れたのです。テレマーク開眼の瞬間でした。

彼女は、沢から見上げた尾根の急斜面を腰まで雪に潜りながら、いや、腰まで浮上しながらスローモーションビデオの映像みたいに6個の角膜に焼きついたのでした。名雪長官の『ハイイ、拍手!』の掛け声に、颶爽と滑り去って行く女神様を拍手で見送っていたのでした。

ここからが、さあ大変。悟りを開いた江平テレに怖いものなし。保久礼小屋からの登り返しの後、颶爽とテレマークで尾根、樹林帯、木の根っここの障害物を小気味良く駆け下る様は、『F1のシューマッハだった』とは名雪連合艦隊司令長官と木村隊長のいつわざる言葉です。

13:00頃、駐車場へ到着。『え~と、明日はどこへ行くの?、ところで。』と、江平。相変わらず、ノーテンキ。

結局、江平の帰りの時間を気遣って戴き平標に決定した為、苗場スキー場近くの元橋の駐車場で最後の大宴会で盛り上がる。

3/22(日)

『ゆんべは花火の音が煩くて眠れなかつたよな』の言葉がピンとこない。どうやら、江平だけ熟睡モードだったらしい。だが、元気に親子ともどもムックと4時に起床するトコだけは

3人の息はあっている。

6:00頃出発。河内沢沿いの雪の残る車道を進む3人の歩調はバラバラだ。木村隊長は、どうも「ひも」に特別な執着がある様に思えてならない。最近、山の道具に『金に糸目はつけねえ』という背景には、きっと裏で「ひも稼業」をやっているに違ないと私は踏んでいるのだが‥。

名雪連合艦隊司令長官と私は、ザックのサイドに板を付けてまっとうな道を進む。

別荘地を過ぎ、河内沢を渡り暫くして左側へのヤカイ沢へと入る。大きな送電塔を目印に無数にあるトレースを選びながら平坦な沢を奥へつめて行く。

中途半端な小木帯を抜けると、右手の尾根に見事なブナの巨木とパフパフ感の漂う乙女の肌にも似た美味しいそうな、ウフッ、そそられそうな斜面が飛びこんでくる。またまた、ムックである。昨日テレ開眼した江平は、その斜面を滑ることだけでイッテしまいそうな予感がした。

しかし、そこに辿りつくまでが大変であった。そそる斜面を右手に見ながら稜線へ続く急斜面にシールも利かずツボ足に切り替え、先行する二人を必死で追いかける。稜線上は固く締まった雪面で、テレブーツの江平はパックリと割れたシュルンドがすぐ下に待ち構えていたのでちょっとビル。滑ったら、怖いパックンチョ。

今日は、10:00に下降開始と決めての「門限有りの山」だったので山頂まであと3歩のところで、計画通りここで踵を返す。3人とも板を着け硬い雪面を尾根沿いに100M程慎重に下り、右手の樹林帶の柔らかい雪面へトラバース。数回のキックターンをいれ、例のそそられる斜面の上部まで

滑りおり大休止。ここで、昨夜の「花火の音の謎」がやっと解けた。

正面に苗場スキー場が見える。ここからのナイター花火の音がうるさくて眠れない二人を尻目にグースカ安眠していたようだ。

さああ、ここからが今日の一番美味しい斜面だ。念のため、持参したドライバーでクライムサポートを外す。昨日までの2日間、滑りながらブーツの下に雪がダンゴ状に着き否応なしにつま先立ちにならざるを得ないのは、クライムサポートのせいかな?‥と。どうなのかな?

守門の女神様の教え通り、リードスキーのトップを浮かしながらパフパフ斜面に飛びこむ、スピードが落ちるのを待ち、立ちあがりながら足を切り替える。でも、身体はまっすぐフォールラインを向いたままだ。おおお、おおお、深い雪の中でしっかりと下半身が回転しているのを感じる。自分の左へ、右へと雪煙が交互に飛んで行く様に一人だけで酔っている姿に後ろの二人から『ば~か!』のエール。それに応え、ここにもあったあのモナカ雪で最後にデングリ返りをする江平。『やっぱり、モナカは好かん!』

ヤカイ沢から車道に戻り、雪がない処でも執拗に板を着けたまま器用にアスファルトの上を走る木村氏と、何くそ!とそれを同様に追いかける名雪長官のうしろ姿をまぶたに焼付けて、一人まっとうに板をザックに担ぐ江平の山スキー(テレマーク編)の終了です。たぶん‥、12:00頃。

では、このへんで日本のみなさん、サヨナラ、サヨナラ。

九州のテレマーカーより

(江平 記)

会津駒ヶ岳（木南デビュー戦）

2003.3.30パーティー L 木村 一、吉田 仁、木南真紀子、名雪博二
松原丈夫（ACC-J 東京）、佐藤さん（無所属）

会津三岩岳に積雪期にスキー登山をしたいと思い、ここ数年通っているがまだ望みを叶えていないので今年こそと思い計画したが、直前になって会津駒ヶ岳に変更になってしまった。

メンバーはスノーボード組の吉田君、木南さんとスキー組の木村、松原さん、佐藤さんの計5名です。今年クラブに入会した木南さんは雪山に登るのは初めてで、2000m級の山に登るのも初めてとの事。吉田君は2月からスノーボードを始めて3ヶ月にしてバックカントリーで滑っている強者である。これからACC-J茨城を背負っていく2人とこれから何回バックカントリーで滑る事が出来るか楽しみが増えました。

桧枝岐に来たときの定宿に車を止めてテントを張り軽く小宴会後就寝。

翌朝6時起床7時出発。前に来た時（4月）と比べると遙かに雪が多く滝沢橋のところで1.5m位の雪の段差になっている。シール登高で行きたいところだがボードのメンバーに合わせてつぼ足で登高開始。林道を少し歩き左の樹林帯に入り急斜面を登ると林道が大きく曲がる所に出た。先行パーティーはシール登高だが我々は上部の共同アンテナまでつぼ足で行く事にして左手の急斜面に取り付いた。

上部でスリップしたら止まりそうもないで後続に注意しながら登高を続けると尾根に飛び出し、少し登ると共同アンテナに到着。ここで朝食を採り小休止。スキーのメンバーはスキーにシールを貼付でシール登高に

切り替えたが、ボードのメンバーはスノーシューを装着して登高開始。吉田君の装着しているスノーシューは快適らしく快調に高みを稼いでいる、それに比べて私が借りてきたスノーシューは使い物にならない。その影響で木南と木村のダブル“木”コンビが遅れ気味。緩いブナ林を登ると右手に無木立ちの大斜面が見渡せるようになってきた。

女性的な滑らかな曲線を描く会津駒ヶ岳は雪に覆われると本当に美しい山になる。1時間後にはあの頂きにシュプールを刻む事が出来ると思うとワクワクしてしまう。これが山スキーの魅力かも知れない。駒ノ小屋は屋根の一部が見えるだけで今は雪の下で面影もない。ここからは頂上に続く真っ白な大斜面に歩を刻みながら登ると、メンバーが待っている頂上にひょっこり飛び出した。ここから眺める越後三山、燧ヶ岳、三岩岳等には登高意欲をそそられる。

いよいよ滑降開始。みんな思い思いのシュプールを描きながら斜面に飛び込んでいくが、ボードの吉田君、木南さんも快調にターンを決めて滑降していく。吉田君はボードを始めてたった2ヶ月とは思えない程ターンが決まっている。アット言う間に駒ノ小屋着。更に小屋直下の斜面にシュプールを刻むと森林限界に着いてしまった。快適なのはここまでで、ここからは重い湿雪に苦労しながらの滑降になってしまった。

後ろを振り返ると前転、後転、横転と転倒のオンパレードだ。山スキーでは

どのような雪質でも転倒しない技術が必要だ。なぜなら、転倒する度に起き上がるのに体力を消耗し、疲労が増していくからである。悪雪ではシュテムターン、ボーゲン。棒ズリターン等あらゆるテクニックを駆使して転ばないように滑降し体力の温存を図るべきだ。

しかし、どんな悪雪でも下降は早い。共

同アンテナまで滑降して小休止後、樹林帯の急斜面に入るがどこから入るか多少迷ってしまう。

かすかについた先行者のトレースを頼りに急斜面いり込み、林道終点まで下り、後は林道を流して滝沢橋着14:00

(木村 記)



会津駒ヶ岳頂上にて 佐藤、木南、松原、木村

《 友 好 山 岳 団 体 の 月 報 、 会 報 、 そ の 他 》
あ り が と う ご ざ い ま し た

—月報—

- ◎Rohman NO. 208 2002. 10 B5 36P 浦和浪漫山岳会
奥利根・櫛俣川~南沢、上越・檜又谷大スラブ、平標山、足尾・浮川小田倉沢~右岸尾根、南会津・黒谷川周辺、川内・割岩山東面スラブ、広倉沢右俣ほか
- ◎Rohman NO. 209 2002. 11 B5 30P 浦和浪漫山岳会
秋の集中・南会津・窓明山、上越・西ゼン、焼石・南本内川本流、奥利根・矢木沢川幽クラ沢左俣、奥秩父・入川股の沢ほか
- ◎Rohman NO. 210 2002. 12 B5 20P 浦和浪漫山岳会
日和田山岩トレ、天神平雪上訓練、山人祭報告、山行一覧ほか
- ◎Rohman NO. 211 2003. 1 B5 23P 浦和浪漫山岳会
正月山行・夫婦淵温泉~日光沢温泉~鬼怒沼、南会津・荒海山荒海川朝日岐沢、尾瀬ラットトレほか
- ◎Rohman NO. 212 2003. 2 B5 16P 浦和浪漫山岳会
南会津・駒止峠、日光・菖蒲ヶ浜~千手ヶ浜~中山~戦場ヶ原~竜頭の滝、南会津・斎藤山ほか
- ◎Rohman NO. 213 2003. 3 B5 17P 浦和浪漫山岳会
冬の集中・上越・足拍子山、谷川岳遭対訓練ほか
- ◎Rohman NO. 214 2003. 4 B5 23P 浦和浪漫山岳会
栗駒山OB山スキー、奥利根・芦沢右岸尾根~雨ヶ立山、下田・笠掘ダム~光明山~中の又山~日本平、尾瀬長蔵小屋ピストンほか
- ◎わらじ NO. 559 2002. 10 B5 22P わらじの仲間
秋の集中報告・平ガ岳、北ア・黒部嘉々堂谷、韓国・雪岳山、奥利根・矢木沢川西メーグリ沢ほか
- ◎わらじ NO. 560 2002. 11 B5 30P わらじの仲間
越後・三国川銅倉沢、ヨセミテ日記ほか
- ◎わらじ NO. 561 2002. 12 B5 16P わらじの仲間
南会津・伊南川小川沢~汝倉山、黒谷川恵羅窪沢、只見川・北の湖沢、上越・丸山沢~ナルミズ沢、恋ノ岐川、上越・コベックラ沢右岸尾根~稻包山ほか
- ◎わらじ NO. 566 2003. 1 B5 26P わらじの仲間
中央ア・黒覆尾根、八海山・ラットトレ、正月合宿・鉱山道尾根~越後駒ヶ岳ほか
- ◎わらじ NO. 567 2003. 2 B5 18P わらじの仲間
冬合宿・越後・荒沢岳~中ノ岳~八海山、滝ハナ沢左岸尾根~滝ハナ沢右岸尾根~越後駒ヶ岳、頸城・戸隠P6 尾根ほか
- ◎わらじ NO. 568 2003. 3 B5 14P わらじの仲間
越後駒ヶ岳正面尾根、越後・金城山北尾根、新春ハイキング、上越・仙ノ倉北尾根ほか
- ◎わらじ NO. 569 2003. 4 B5 12P わらじの仲間
利根川横断山スキー、エビス大黒の頭南尾根ほか
- ◎さわぐるみ NO. 4 2002. 10 B5 22P グループ沢胡桃
二王子・内の倉川七滝沢、谷川・茂倉谷、虎毛・春川ダイレクトクロアール、役内川潰沢三滝沢~赤湯又、南会津・檜枝岐川黒檜沢~ミチギノ沢ほか

- ◎さわぐるみ NO. 5 2002. 11 B5 26P グループ沢胡桃
谷川・足拍子沢、栗駒・産女川、谷川・赤谷川、秋の集中・和賀山塊ほか
- ◎さわぐるみ NO. 6 2003. 1 B5 23P グループ沢胡桃
北アルプス・霞沢岳、丹沢・中川川篠子沢、水無川源次郎沢ほか
- ◎さわぐるみ NO. 7 2003. 2, 3 B5 14P グループ沢胡桃
八幡平、上信越・笠ヶ岳登山、湯ノ丸山、雪山レスキュー、上州武尊山山スキーほか
- ◎揖斐川遭難報告 2003. 3 B5 19P グループ沢胡桃
会員3名が季節外れの大雪で下山できず、ヘリにて救出される。その報告書。
- ◎Next ! NO. 82 2002. 10 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん
八幡平・兄川倉形沢~知恵ノ沢、飯豊・胎内川ほか
- ◎Next ! NO. 83 2002. 11 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん
キノコ山行・檜枝岐上ノ沢ほか
- ◎Next ! NO. 84 2002. 12 B5 14P 山岳渓流釣り集団むげん
胆沢川・小出川ほか
- ◎Next ! NO. 85 2003. 1 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん
奥多摩・つづら岩ほか
- ◎Next ! NO. 86 2003. 2 B5 12P 山岳渓流釣り集団むげん
会員の近況報告ほか
- ◎とまのかぜ NO. 119 2002. 10 B5 73P 童人トマの風
朝日・見附川入りトーヌシ沢本谷、右俣、根子川入りソウカ沢、朝日川黒俣ガンガラ沢、野川五貫沢~越口沢、根子川柴倉沢、三面川岩井俣沢畑沢、船形・笹木沢、越後駒ヶ岳・大チョーナ沢、水無川デトノオオナデ沢、日高・カムイエクウチカウシ山~コイカクシュサツナイ岳縦走、佐渡・戸地川左俣、川内・矢沢川ヨモギ沢、真昼・成瀬川桑木沢、末丈ヶ岳・滝ノ沢ほか
- ◎とまのかぜ NO. 120 2002. 11 B5 50P 童人トマの風
越後・破間川大雲沢黄蓮ハゲ沢、中津又沢、本高地沢、エラオトシ沢、上黒姫沢、破間川本流、刈谷田川深沢谷、高清水沢、会越・叶津川餅井戸沢、越後・入道沢、奥利根・小穂口沢本谷、尾瀬・片品川センノ沢、栗駒・三滝沢~赤湯沢~虎毛沢、越後・三国川下津川本谷、谷川・マチガ沢本谷、鏡山滝ノ沢ほか
- ◎とまのかぜ NO. 121 2002. 12 B5 39P 童人トマの風
天覧山レスキュー、荒雄・江合川上芦沢、三森峠~中山峠、小川山フリークライミング、丹沢・円山木沢、妙義・谷急沢右俣、南八甲田・荒川~逆川ほか
- ◎とまのかぜ NO. 122 2003. 1 B5 19P 童人トマの風
春日ルンゼ、富士山、白毛門、北八ツ・天狗~縞枯山、県界尾根、南会津・御神楽沢ほか
- ◎とまのかぜ NO. 123 2003. 2 B5 57P 童人トマの風
金城山~巻機山、八ツ・ジョウゴ沢、尾瀬・燧ヶ岳、南アルプス・仙丈岳、駒ヶ岳、八ツ・阿弥陀北稜、石尊稜、台湾・木瓜渓~天長渓、城ヶ崎フリークライミング、赤岳主稜、那須・朝日岳、三本槍岳、虎毛・須金岳山スキー、南アルプス・光岳、谷川・茂倉岳北西稜、神津牧場アイス、御場山西ルンゼアイス、三段の滝アイス、仔犬殺しの滝アイス、五頭・松平山~五頭山、笛吹川東沢アイス、頸城・神奈山、南アルプス・弘法小屋尾根ほか

◎とまのかぜ NO.124 2003.3 B5 62P 童人トマの風

入笠山、日留賀岳、八ツ・阿弥陀南稜、佐渡山と黒姫山、南ア・荒沢出合アーリース
ブリング、西表・前良川～浦内川、西上州・不動ノ滝、南ア・黒法師岳、根子岳、
飯豊・棚橋山～馬ノ髪山～俎倉山、奥武藏・冠岩沢、白山・銚子ヶ岳～野伏ヶ岳、
尾白川アイス、鳥甲山白くら尾根、赤くら尾根、黒木尾根ほか

◎とまのかぜ NO.125 2003.4 B5 47P 童人トマの風

天覧山岩トレ、八ツ・東天狗岳、谷川・赤沢山、越後・大割山、荒船・相沢アイス、
北ア・焼岳山スキー、八ツ・観音平～権現岳～編笠山～富士見スキー場、奥多摩・
軍刀利沢、上州武尊・鹿俣山～獅子ヶ鼻山、神楽峰山スキー、会津駒山スキー、
越後・銅倉尾根～巻機山、南会津・三岩岳～大戸沢岳、和賀・羽後朝日岳山スキー、
爺ヶ岳東尾根、佐渡・ドンデン山、上越・巻機山、大雪山、栗駒山、
谷川・西黒沢スキー、武能岳西尾根ほか

◎すずらん通信 NO.260 2002.11 B5 12P 鈴蘭山の会

越後・魚野川渋沢、水無川真沢～祓川、塗川西俣沢カラ沢、武尊沢、つづら岩トレほか

◎すずらん通信 NO.261 2002.12 B5 6P 鈴蘭山の会

代表就任の挨拶ほか

◎すずらん通信 NO.262 2003.1 B5 6P 鈴蘭山の会

新春足慣らし山行ほか

◎すずらん通信 NO.263 2003.2 B5 10P 鈴蘭山の会

谷川・雪上訓練、発行だ山スキーほか

◎すずらん通信 NO.263 2003.3 B5 4P 鈴蘭山の会

万座スキー場～浦倉山ほか

◎すずらん通信 NO.264 2003.4 B5 18P 鈴蘭山の会

三田原山、焼岳山スキー、南会津・梵天岳山スキー、乙妻山山スキー、
谷川・シッケイ沢山スキー、天元台山スキーほか

◎渓游 NO. 2002.7 A4 4P 邑行同人渓游会

氷ノ山・宮の下川滝の谷、台高・大台ヶ原周辺、大和谷垣外保谷右俣、
四郷川の又迫谷、大峰・葛川枝又谷ほか

◎渓游 NO. 2002.9 A4 9P 邑行同人渓游会

床鍋谷～瀬場谷、台高・宮川堂倉谷本谷、比良・安曇川ヘク谷、南紀・滝本本谷、
小口川静閑淵、北ア・金木戸川小倉谷、ほか

◎渓游 NO. 2003.1 A4 14P 邑行同人渓游会

北ア・小倉谷、台高・中奥川戸倉谷、大峰・滝川大谷、四国・保土野谷～エビラ
山、夜叉ヶ池、敦賀・野坂岳、大峰・十津川旭ノ川中ノ川ほか

会報

◎ADVENTURE forum NO.11 2003.2 A4 8P 植村記念財団

植村直己の原点だった山岳部時代から・・・ほか

◎年報わらじ NO.25 2002.12 B5 207P わらじの仲間

2001年冬合宿・飯豊、夏合宿・飯豊、冬の集中・足拍子岳、春の集中・坪平山、
秋の集中・下津川山、訓練山行 2本、地域別山行報告として北海道・東北11本、
越後・毛猛・会越15本、奥利根・尾瀬・南会津14本、那須・男鹿・日光・
足尾7本、上信越11本、北ア・頸城8本、東京近郊・その他13本、海外2本ほか

◎年報とまのかぜ NO.9 2002.9 B5 334P 童人トマの風

無雪期の山として朝日・飯豊5本、川内・会越12本、南会津5本、越後・谷川12本、
上信越4本、奥利根3本、北 海道・東北28本、頸城2本、北ア・中央ア2本、奥秩父・
佐久7本、関東周辺6本、離島・海外5本。雪の山として 南会津・尾瀬3本、
谷川・越後・奥利根8本、北海道・東北10本、佐渡1本、北ア・白山5本、頸城4本、
八ヶ岳4本、 南ア3本、関東周辺2本ほか

◎すずらん NO.23 2002.11 B5 128P 鈴蘭山の会

山スキーの記録として大雪1本、東北7本、尾瀬4本、谷川2本、上信越4本、頸城1本、
北ア5本。沢登りの記録 として東北2本、只見2本、会津1本、越後1本、上越4本、
谷川5本、武尊・足尾・日光3本、奥秩父6本、丹沢3本、 南ア2本、北ア1本。

会山行・訓練として10本。その他の記録として4本。ほか

◎ALPINE NO.8 2002.11 B5 202P 名古屋ACC

乗鞍岳周辺の谷として24本、定例山行として春冬合宿、雪崩講習、集中、雪上訓練
など10本、遡行として紀伊半島10本、白山6本、中央ア2本、南ア2本、木曾御嶽3本、
北ア2本、乗鞍1本、上信越6本、越後・東北7本、 屋久島1本。積雪期の山として
20本。

その他白山の積雪期乗鞍バリエーションの可能性を探るなど

◎岳人REPORT NO.10 2002.12 B5 48P まつど岳人俱楽部

創立2周年を迎えたクラブの会報。山行報告として谷川岳一ノ倉沢鳥帽子奥壁や
3ルンゼ、北岳バットレスなど8本の記録。その他エッセイなど

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

もう読んだ方が多いと思いますが、ACC-J茨城会員の笹平君が寄稿した山行記録が岳人7月号に3ページに渡って載っています。昨年の夏に知床半島の単独縦走した記録ですが、笹平君の写真入りで載っていますので、全国の女性ファンからの問合わせが多いのではないかと思います。今回発行の会報もそうですが笹平君の原稿枚数が一番多く、会報を編集する者から見ると大変ありがとうございます。彼も最初の頃は10行位しか原稿を書かなかつたのですが、今では岳人にも掲載されるような山行記録を書くまでに成長したことは同じクラブ員として嬉しい限りです。文章を書くのは誰でも苦手です。だが文章を書く頻度が多くなれば必然的に文章を書くコツを会得して笹平君のようにメジャーな山岳雑誌にまで掲載されるようになりますので、変臭長から会報原稿依頼があった時には宜しくお願ひします。以前の会報は変臭長が編集していましたが今の編集者は変臭長です。笹平君への交際申し込み窓口は変臭長ですので、全国の女性ファンの皆さん沢山の申し込みをお待ちしています。

あ！ そうそう、この会報に寄稿した会員への交際申し込みも同様に変臭長が窓口です。

尚、申し込み料金は3回まで無料ですので奮って応募して下さい。

なに、『顔写真がないと申し込み出来ない！』分りました近日中に会員名簿を顔写真と一緒に掲載する事を約束しましょう。

(变臭長)

季報〔R & V〕第47号&48号

発行者：本図一統

発行所：ACC-J茨城 305-0861 茨城県つくば市谷田部2268
木村 一九

編集者：木村 一

印刷所：やまと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団